

小田原史談

第 136 号

発行所 小田原史談会
小田原市南町 2-3-21

大詔奉戴日の 日新工業株小田原工場

小田原市久野にあったこの工場(現日本たばこ(株)小田原工場)は、昭和十八年七月、川崎工場の延長として建設され、主に水上飛行機のフロートを製造していた海軍航空本部管理工場であった。

人に当たると、それは、昭和十九年十二月八日の大詔奉戴日である、という結論となった。開戦から三年目の日に当る。

一同は東の宮城の方向に向っている。列の先頭には、戦闘帽をかぶり巻脚絆をし

た、校長が立っている。教

員や生徒たちは、日の丸に「神風」と染めぬかれた手拭を鉢巻にしている。

並ぶは、県立小田原高等女学校(現小田原城内高等女学校)、小田原専修高等女学校、それに山形県立第二高等女学校の、勤労働員生徒、さらには、徴用による二十歳前後の女子挺身隊員たちである。

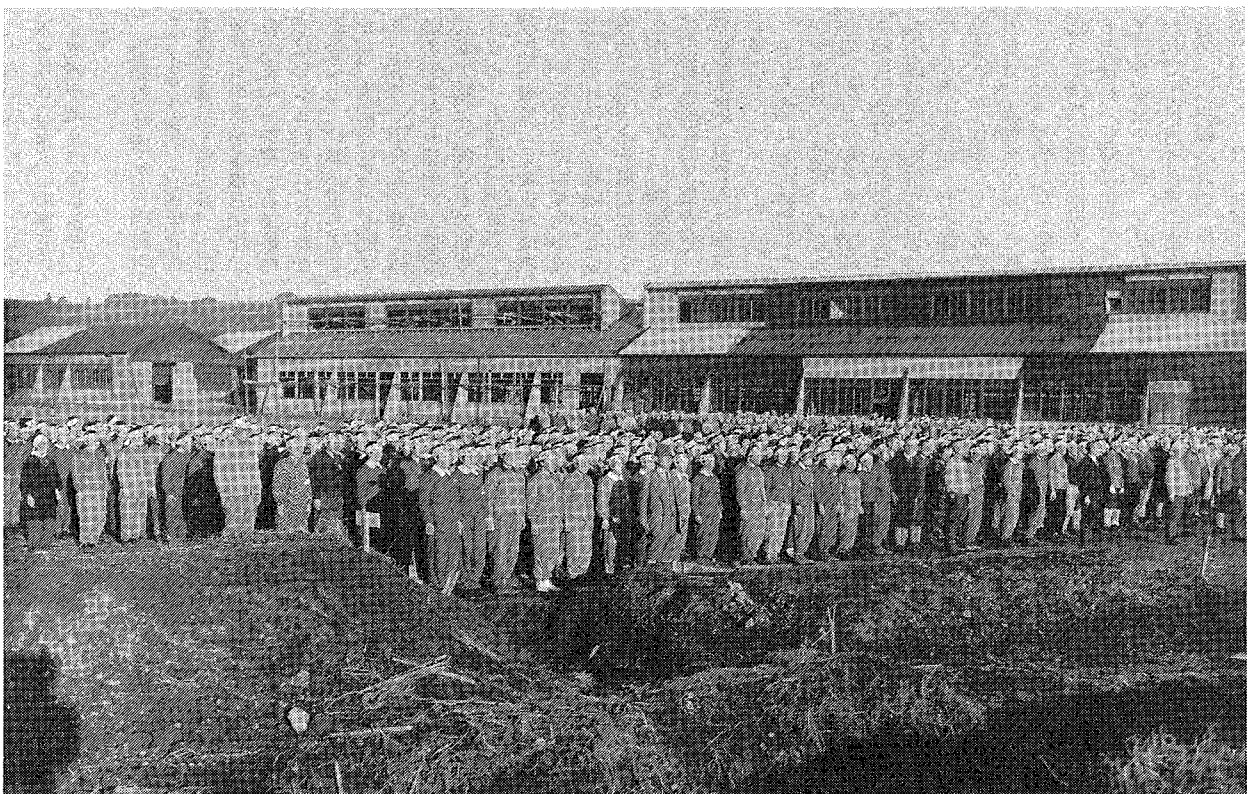
この手拭は、この年の十月二十五日、海軍神風特攻隊がレイテ沖で米艦を攻撃したのに因んで作られた、ともいわれる。

左手には、諏訪ノ原に続く久野の丘陵が見える。手前の土が掘り起してある箇所は防空壕らしい。

この写真がいつ頃撮られたものか、当時、小田原高等女学校の生徒であった二、三

の情景を冷静に見つめていた一人の教師がいた。小田原高女生徒引率の直接責任者吉田仁麿教諭である。△神だのみの精神主義を強調しても、資材は欠乏し、空腹をかかえての生産力増強では、とても日本が勝つ見込みはない。しかし、そのことを生徒に口にするには出来ない。日本が敗れることは、目の先に見えている。そのとき生徒の指導をどのようにしてよいのか……。引率する生徒は、来年三月の卒業を控えている。上級学校進学希望の生徒には、どのように勉強させてよいのか……。吉田教諭は苦慮していた。

(岡部 忠夫)



学徒勤労動員の記録

そして終戦迄

湯川 玲子

太平洋戦争も風雲急を告げる昭和十九年六月、学徒動員令によって、当時県立小田原高等女学校(現在城内高等女学校)に在籍した私達四年一組五〇余名は、吉田仁磨先生の引率で他の組に先駆け、試験的に市内久野の軍需工場日新工業株式会社小田原工場(現在日本たばこ産業株式会社小田原工場)へ学徒報国隊として動員されました。

すでに二年生の頃から卒業の合間に、農村や内閣印刷局、箱根小涌谷での植林作業と勤労奉仕の体験はあるにせよ、軍需工場での作業は始めてで、先生方は女学生に耐えられるか、と大変心配しておられました。最初は講堂で学科授業も行なわれましたが、会社側の都合があったか、長続きせず、その内、八月十五日には学校に残っていた四年生全員一五〇名が入社、九月一日に三年四組五〇数名が続き、九月六日、小田原専修高等女学校(小林病院内に設置)生徒一〇五名、

十月十七日には県立第二山形高等女学校(現在山形北高等女学校)四年生一三六名が入社、市内幸町(本町二丁目)の料亭「春日」が八紘寮と名付けられ、こゝを宿舍とされました。続いて十二月十一日には県立小田原中学校(現在小田原高等女学校)二年生二三名が入社、この内には引率者の一人として私の父が、そして私の同期生の弟さん達、弟も参加しておりました。工員の内には地方から徴用で入社した人、また、新名高等女学校(現在旭ヶ丘高等女学校)松田高等女学校の卒業生が女子挺身隊としてすでに働いておられました。

翌二十年七月には工員を含め、一六〇〇名程になりました。工場は部品、組立、検査・塗装とに分れ(二十年六月に一棟増築される)、製作品は、海軍水上飛行機のフロート(横浜市杉田の日本飛行機に納入)と「93式P1戦闘機」の燃料タンク(座間の海軍工廠に納入)

で、二十年に入って海軍戦闘機「紫電改」の胴体の試作が行われました。

た人もいました)、これを頂きながら友人との語らいや読書が唯一の楽しみでした。

製作工程はジュラルミンの平板を図面通りに切断し、電気ドリルで穴あけや(一耗ずれても不可、生命にかかわるから、と注意を受け、不良品をオシヤカと言いました)、ハンマーで原型通りに形を造り(板金)、切断面には面取りと言って鋸を掛け、これを焼入れし(炉に入れた後、水につける)、その後、木槌や手を使って歪みを取り、又、平板に強度を持たせる為にフランジ(折曲げ)、プレス加工等で整形。そして仮組、検査本組で、接合はリベット(鉄打ち)、又、熔接加工で最後に塗装でした。その完成品がトラックに乗せられ正門より出て行くのを目

の送りにした時、か弱い女学生でも力を合わせれば、と誇らしく思いました。

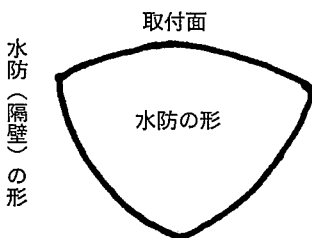
服装も私服から国防色(カーキ色)の帽子と作業着が貸与され、又、十二月八日の大詔奉戴日には、日の丸に「神風」と染められた通し、馴れぬ作業に体調を崩す者も出始め、健康診断で結核や脚気と診断されると、工場内の事務所や学校工場で、下級生が従事していた積、みつまたの皮むきや(内側の繊維が風船爆弾や落下傘の原料になる)と聞きました)、傷夷軍人の白衣の修理の仕事とか、或いは付属の保育園へ廻されました。

そして忘れもせぬ翌二十年の二月二十四日、前日から降り出した雪が早朝迄に平地で三千糶、私の家があった小峰公園(競輪場の辺り)では、六十糶から七十糶の当地としては珍らしい大雪となり、出勤もためらう程でしたが、毎朝、家の前を通過して横浜方面へ出勤される会社員の足跡に足を入れて行けば良い、と、父に言われて七時過ぎに家を出たもの、歩幅が違い、片足は築でももう片方は雪を踏

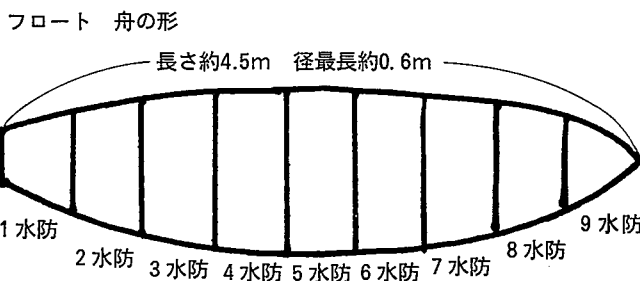
みしめながら歩を進めねばならず、大変もどかしく思いました。何んとか駅まで行ったもの、小田急線は不通で友人も見当らず、致し方なく一人で工場への道を見当をつけて歩きました。やっこの事で正門に辿り着いた時は、すでに十一時を廻っておりませんでした。

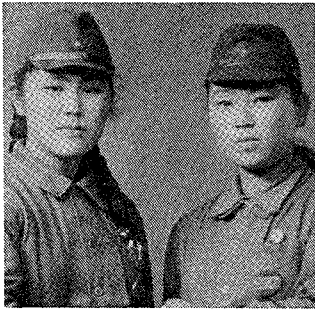
私達は徹夜こそなかったもの、日曜日なしの月、月火水木金、金で働き通し

この時、女学生の私でも敗戦の気配を感じ、不安に駆られました。昨春秋には、マリアナ基地からB29爆撃機の東京初空襲があり、そして三月十日、東京は大空襲を受け、死傷者約二十一人。当時、伯母一家が本所に在住していたので、その安否を気遣いながら、工場に通い続けました。硫黄島の日本軍が玉砕したのもこの頃でした。



横断面図
水防が九箇所あり、一部が射抜かれても使用に耐える構造となっていた。





日新工業の従業員と同じ服で作業をした卓立小田原高女生徒(杉田綾子さん所蔵=右側)

ました。

そして三月三十一日、学校での卒業式。すでに講堂は疎開してきた内閣恩給局が使用しており、雨天体操場が式場になりました。卒業証書の他、手渡された成績表は、二・三学期は空白で学年欄に修練と実業のみ、評価がついておりました。

現在の様に卒業アルバムや華やかな謝恩会もなく、恩給局に女子挺身隊として働いていた上級生達が、口々に「可哀相に！」との声を背に受け、学校を後にしたのでした。

でも山形第二高女生の工場内での卒業式に比べれば、良しとせねばなりませんでした。

そして、医師、看護婦、教師の志望者と、家庭が農家だったり、母を亡くした者は、農業要員、家庭要員との名目で卒業出来ました。他の生徒達は山形第二高女生と共に、約半数は専攻生として工場に残りました。

た。終戦時には、種々の理由でさらに減ってしまいましたが、

私は、十九年十月に母が戦争と家族の将来を心配しながら他界。

従って二十年四月よりは工場での作業からは開放されましたが、弟が海軍兵学校予科に入学、妹の小田原高女への入試と続き、平常の家事以外にも昨年から続いていた隣組から廻される楮、みつまたの皮むきの多忙な毎日でした。

そして晩秋頃から、小田中に駐留した陸軍高射砲隊の多分、応召された老年兵と思われる人達が、夕闇に紛れて物乞いに来る様になり、父が貴方達の方が食糧は充分に支給されるのでしょ

う。と尋ねた事がありました。が、実際は満足に食事が出来なかつた様で気の毒になり、その度に、配給のすゝめや、家庭菜園で穫れた野菜を分けて上げました。

が少なく、父が自分の不在の時、娘二人になる事を心配し、町中への引越しを、

あちこち物色している内、当時、東京から疎開して、内科医の江良先生の先々代が建てられた、広いお住居に(敷地四百五十坪余り)

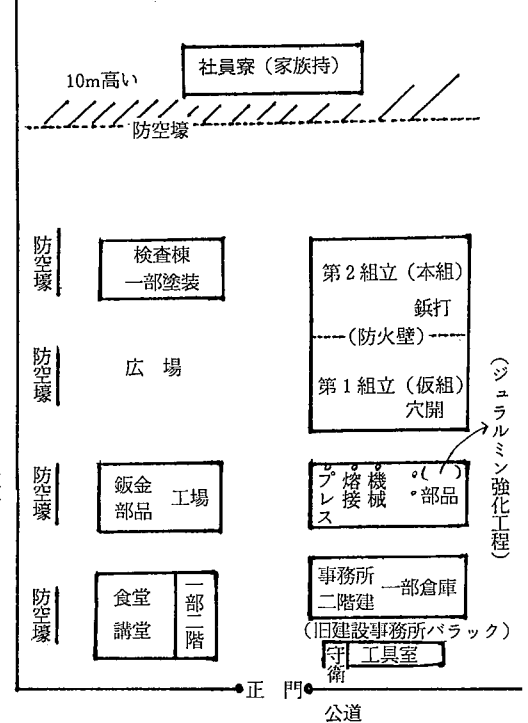
住んでおられた外交官の寺崎英成氏(古陶磁器に鑑識眼を持たれ、父とは同好の士としてのお付き合いがありました。また、ルポライターの柳田邦男著「マリコ」の主人公の父上でもありまし

た)は、奥様がアメリカ人でいらっしやつたため、湯河原の吉浜に移転するから後に入ったら、とお声が掛り、父は二つ返事で小峰の山を下りる事を決めてしま

いました。私は、郵便局、警察署(現在市営駐車場)が近い事、その家の内玄関を境にして南側に兄上の寺崎太郎氏(戦前にルーマニア公使、戦後に外務省事務次官、昨年九十三歳で御他界)御一家が住んでおられるので気の進まぬ事でしたが、結局引越しを致しました。

寺崎氏が親米派の外交官でおられたので、時折、憲兵が「お変わりありませんか」と顔を覗かせたり、その憲兵の目を気にされた奥様は(濃紺のドレスの似合う美しい方でした)早朝、新玉

工場略図 敷地 22,000坪余



(現栄町)のカトリック教会に通っておられました。

また、近衛公の密使が来られるかも知れぬ、と父から言われて緊張の毎日でした。

密使ではなかったと思えますが、外務省から山本さんとと言われる方が時折来られ、寺崎氏が御不在でも、ピアノを弾かれたりして、何時間でも待っておられました。

吉田元首相のお宅から、柏又の蒲焼の御注文を取次いだり、私なりに神経を使いました。その合間には、父が学校の職員農場や自宅の庭を使って野菜を作っておりましたので、草取りやじゃがいも、落花生の収穫に百段坂を往復し、途中米軍機の機銃掃射に傍らの溝に身をかがめ

ながらも、青空に銀色に輝くその機体を美しい、と眺めた事もありました。

四月に米軍が沖縄本島に上陸、十五日には川崎大空襲、五月二十七日には再び東京、続いて二十九日横浜大空襲とその途上となる小田原は頻りに警戒警報、空襲警報が鳴り響き、隣組の当番に当たつた月には毎回、メガホン片手に組内を連呼して廻りました。

寺崎太郎氏の御家庭も、下のお子様二人が、小学生でいらつしやつたので、下曾我に家を建てられ、再疎開されました。

その跡に、眼科の四倉先生の御自宅が郵便局に近い為、強制疎開となり、引越して来られました。

新工業で親しかった山形第二高女の佐藤さん(旧姓鹿納)や小関さん達が突然見

え、急に山形に帰る事になった、とお別れに来られました。その頃の戦況はますます悲観的となり、これが最後のお別れか、と有合せの箱根細工の箱を差し上げ、彼女達の姿が見えなくなる迄お送り致しました。

これは後で判つた事です。が、昨年一緒に山形を離れた、川崎の軍需工場で働かれた第一高女生が、空襲で犠牲者が出た上、全員が焼け出されて山形に戻って来られた為、第二高女の父兄達が心配され、各方面に働

運ばれた結果、母校内の工場で働かれる事になったの

でした。八月六日には、父の郷里に近い広島市に原子爆弾が投下され、続いて九日には長崎市と、これらの地より遠い小田原にもその大惨状の様相が断片的に伝えられ、父方の親類の人達や、長崎県より山口県防府市に移った弟の身を案じました。また、母方の叔父が再度の応召で広島市に、旧制広島高校に入學したばかりの従兄が、そのおびただしい数の遺体の収容に当った事を後で知りました。

そひそ話とは、終戦の日に父がやっと話して呉れましたが、日本政府がボツダム宣言を受諾した、と言う事でした。

同時に黒い塊が直ぐ目の前に落下し、床を突破りました。私は恥かしい事に腰を抜かし、早くこの場から逃がれねば、と思いつながら、身体はどうにもならず、父達か私の悲鳴を聞いて「どうしたー早く外へー」と叫んでいるのに、口は動いていないのですが、声になりませんでした。

火勢が強くなり、家が次々に崩れ落ちるのか、凄まじい音が耳に入り、広い庭の防空壕でも入ったまゝでは、火がどちらに向っているのか判らず、父が心配して近くに製氷工場もある事だし、と様子を見に行くと言って出たまゝ、中々帰って来ませんでした。そして夜が白む頃、疲れ切った表情で帰宅。矢張り製氷工場に火がついたら大変だ、と町内会の人達と消火に当ったのでした。

防空壕から出て家に戻ると、隣組から正午に天皇陛下よりの重大放送がある、との伝達があり、家のラジオで家族だけで拝聴するつもりが、私を姉の様に慕って下さる小学校三年のお嬢さんが、「郵便局で放送を聞こう」と言われるので、局に行くとするにかなりの人が集まって放送を待っておりまして。間もなく陛下の詔勅を読まれる玉音が流れ、それが小学生にはおかしかったのでしょうか、くすくす笑い出したので、周囲の人達の視線が集まり、中には「不謹慎」との声も出て、私はお嬢さんを抱える様にして家に戻りました。

西さんが帰られた後の父の言動で、うすうす感じていたものの、矢張り玉音放送によって張りつめていた糸が、ぶつ切り切れた思いの虚脱感と昨夜から一睡も出来なかった疲れもあり、午后は皆でお昼寝をしましたが、実際は弟や将来の事が心配で眠れませんでした。後で、山形第二高女の方達の入っておられた八紘寮も焼けた事を知り、早く引き揚げられてよかったです。た事でした。

翌十六日は、妹の担任の星崎先生がお見舞に来られ、無事を喜んで下さいました、手洗いに落ちたのは不発弾だったのでしょか、家主の江良先生にお知らせした後、念の為、憲兵隊、警察に届け、双方から調べに來られました。善処すると言って帰られた儘になりました。

その家の地面は三十種も掘ると水がじくじく出て来る所でしたから、多分腐食したものでしょう。

後年、江良先生もその状態の儘、その家屋敷を処分なさいました。

その翌日でしたか、当時の郵便は遅配つづきでしたが、岡山県津山市に疎開した母方の叔母から、珍らしく早く届いた葉書には、終戦の喜びを一面にあらわし、これからは何んでも出来る素晴らしい時代が来るだろう、と結んでありました。

そして、小田原にも十三日の空襲に続いて十四日夜半の警戒警報で目が覚め、防空壕に入る準備を妹としかけたら、父が、「もう戦争は終る空襲もないだろう」と言うので様子を見ていました。父が、追いつける様に空襲警報のサイレン。父も、おかしいなと言いつながら防空壕に入る準備をしました。

すでにB29の爆音が聞こえたと思つ間もなく、ヒューヒューと言う音がして、あちこちに油脂焼夷弾が投下され、瞬時に中庭に面したガラス戸越し一面に炎が見え、あたかも東隣の家が燃え出したかと思えました。

父、妹は防空壕に入る為、外に出ていましたが、私が最後に手洗いから出ようとすると、バリバリと言う音

と聞き、危険が迫っているのに呑気な事を思い出すもので、幼少の頃、両親から度々聞かされたお伽話に、お爺さんお婆さんが腰を抜かした、と言う事が長い間理解出来ずにいたのですが、これがそうだと苦笑した事でした。

何んとか立ち上って防空壕に向う途中も、我が家の前の道を何処へ避難されるのか、父母が子を呼び、子が父母を呼ぶ悲鳴に近い声、家財道具を積んだリヤカー、荷車の音に、芥川龍之介の「地獄変」にある阿鼻叫喚

と聞き、お嬢さんを抱える様にして家に戻りました。

恩師の御依頼でこの原稿を書くにあたり、当時つけていた日記を終戦直後に焼却してしまい、何分にも四十四年前の事、記憶も定か

でなく途方に暮れましたが、幸い日新工業でお世話になった当時の工作主任、大場威様の御消息が判り、種々同

う事が出来た上に、その部下の方の日誌を参考になさせて載せまして大変幸いです。

また、元第二山形高女の佐藤みどり様、小田高卒業生で現校長の渡辺栄一様、元小田原高女三十七回生有志の方達にも御協力を戴き、感謝致しております。

丁度その頃、同期生の父上で、父の小田中時代の昔の同僚でもあった、満鉄参事の西さんが満洲より、重要な任務を帯びて上京された帰途、市内早川の留守宅に立寄られた後、我が家に寄って下さり、父に何事か

ひそひそ話をしてそそくさと帰られました。父が追いつける様に満洲には行くな、と申した様でした。そのひ

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

北条氏政辞世の歌

我身今消ゆといかにか思ふ

べき空より来り空に帰れば

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)

天正十八年七月十一日、豊臣秀吉の大軍に囲まれ遂に落城し、弟氏照と共に割腹して果てた北条氏政の辞世の歌であるが、武将としては如何にも弱々

しい。籠城して十五万の大軍に対抗しようとした意気ごみは全く見ることが出来ない。武将といえども死に直面すれば、このように無常の風に堪え難く

空の哲理に陥るのであるうか。

それとも、すべての人間は、空の哲理の上に仮の世の営みを続けているのであろうか。心経にある「色即是空」「空即是空」は現代の日本人にも深く

沈潜している。

(高田掬泉)

沈潜している。

(高田掬泉)

(高田掬泉)



おおくだあきこ 田 晴 子

戦時下女学生だった私

◇ 小田原市との御縁

昭和十六年八月、今は亡き父が小田原駅に転勤となり、私も一家は横浜より小田原に移転した。子供の時から小田原は、箱根に行く時の憧れの地であった。私は転入試験を受けて一学年二学期より神奈川県立小田原高等女学校の生徒となった。

その年の七月二十一日に、殉職された松本駅長の後任となった父は、毎月の御命日の早期にはお花とお線香を携えて、ご遺難現場にお詣りさせて頂いた。大雄山鉄道添い二百米位のところに、今は或る方のお庭に墓石がある由、うかがっている。

一周忌には、菊地寛氏に碑文をお願いして碑が建てられた。駅の増築と共に、現在は以前より左端に移されているとのこと。当時の除幕式の写真と碑文(原文

のまま)を載せさせて載く。

松本駅長殉難碑 碑文 鉄道旅行の便利と幸福を受くる方々はどうぞ、一度は足を停めて鉄道旅行の安全のために、

げられた犠牲の一人松本駅長の事を考へて下さい 昭和十六年七月二十二日 暴風雨の夜松本駅長は当小田原駅附近の支障現場を再三視察中烈風豪雨の暗夜とて不幸足を取られて陸橋下に墜落重傷を負い遂に再起されなかったのです

それは戦場の死に見るような華々しさはありませんが職務に忠誠なるわが国鉄職員の魂がはしくも火花を散らした美しくも貴い死だといはねばなりません この貴い殉職は三十八万鉄道職員の胸にいな常に鉄道を利用する一般国民

の胸にも永く伝へねばならないことだと思はれます 昭和十七年七月 菊地 寛

これは琵琶でも小田原高女に於て語られたことを伺った。父は二年後に沼津車掌区長に転任となり、昭和十八年夏、私たちは湯本温泉に一泊して、憶い出多い小田原にお別れした。父はその後、毎月故松本駅長の御命日には、沼津駅午前三時何分かの列車にて小田原の現地を訪れた。

◇ 三島高女学生になって 私は、静岡県立三島高等女学校に三年二学期より転校し、汽車通学となった。

学校の奥の裏山に、野戦重砲兵隊があり、兵隊さん着用の襦袢袴下(厚手木綿の国防色のシャツ上下)をほどく作業が時々廻って来た。学校中、それとも上級生だけだったのか、授業の最後の時間、もしくは放課後が当てられたように思う。クラスの友人は馴れた手つきで、かみそりの刃などどどんどんとき、糸くず綿ばかりなどもきれいに取り除いて、教壇には前身頃、後身頃、袖その他と区別して積まれ、束ねて聯隊に運ばれた。私は一所懸命に取り組みながら「この布

は洗濯してから何に使われるのかしら」と考えていた。

◇ 学徒動員 戦局とみに進んだ昭和十九年、四年生の一学期が終った時に、私たちがも学徒動員で工場へ働くことになった。その頃「学徒出陣の歌」が口から口へと短時日に伝えられ、ラヂオからだったのか先生から教えて頂いた覚えはなく、休み時間の教室では予科練の歌とともに、喜んで歌われた。

「学徒出陣の歌」

一 花も蕾の若枝 五尺のいのち ひっさげて

国の大事に殉ずるは我等学徒の面目ぞ あゝ 紅の血は燃ゆる!

二

あとに続けの兄の声 今こそ筆を投げうちて 勝利ゆるがぬ生産に 勇み立ちたる

三

あゝ 紅の血は燃ゆる! 君は敵とれ我は穂 戦う道に二つなし 国の使命を遂ぐるこそ 我等学徒の本分ぞ

四

あゝ 紅の血は燃ゆる! 何をすさぶか さよ風

神州男児ここにあり 兄も参列し、会社側よりの御挨拶や仕事の内容説明、父兄からの質疑応答などがあつた。一組二組は中島飛行機、私たち三組六十一名は森永食品三島工場と決まった。森永の土井事務主任のお話で、学徒は、陸軍に納める粉末醬油の製造部門と紅茶部門、他の部署にも

七月二十一日、一学期の終業式の翌日に、私たち四年生の学徒動員の入社式が、講堂で挙行された。動員先の会社から見えられ、父



除幕式当日(前列右より)

松本駅長令嬢・菊地寛氏 一人おいて故松本駅長夫人 令嬢方

(後列右より) 伊藤英之助氏(筆者父) 一人おいて

新橋管理部長片岡義信氏

配属され、二百米位はなれた森永乳業工場にも、一部の人たちが行くとの事であった。式の最後は「学徒出陣の歌」を力いっぱい歌ったので、明日からの工場行き

の決意は盛り上った。次の日、担任の小早川節子先生に引率されて、三島市二日町にある森永食品工場に入った。門を入るまでに緑の美しい前庭があり、小川も流れていて、のどかな良い環境の中であった。

右手に創始者初代社長森永太一郎氏の胸像が見えて印象的だった。

紅茶で歓迎会もして頂いて、私たちの職場は地域別に決められた。私は同じ沼津線の須原伯子さんと一緒に、粉末醬油(通称、粉醬油)の最大原料になる塩の乾燥に従事した。

作業場には、直径約八十センチメートルの蒸気釜が、八台ぐらいコンクリート床に据えつけられていた。一人一台の受持で、湿った塩を釜の内側に広げ入れて、長い太い柄の木杓子で左右に手早く掻き回す。初めは重くて力が必要が水分が蒸発するにつれて、木杓子も軽く動いて二十分余りでサラサラになる。これをバットに取って次の工程に運ぶ。私たちはこの作業を繰返した。

作業は蒸気釜に上体を乗り出してするので、塩素によりエプロンや衣類が弱くなった。そのうち国防色の作業着の上衣とモンペ式ズボンが配付された。フウちゃんこと岩崎房子さんは、余力にみんなのお釜を手伝ってくれたので(向い合いで木杓子を動かすと早く上った)作業着が一ばん早くロボロになった。

塩は、十四キロ入り吹(葉で編まれた四、五十センチの四角い袋)で、入り口に積まれていたが、だいぶ湿っていたから実質はそれより重かったと思う。私は普通は二人で作業場に運びこむのだが、たまには一人づつで持ち上げて挑戦っこをした。

サラサラに乾燥した塩は、篩にかけられ、だまは金樋で叩いた。精製されていない葡萄糖を大きな鉄の高熱釜で煮とかし、炭酸アンモニウムなど加え、カラメルを造り、機械で粉末にし、塩と合わせ、粉醬油は出来上った。これを直方体の罐(35×20×15㎝位)に詰めて工員さんがハンダ付けした。

私は別室で出来上って積まれてゆく罐を見て、これを戦地では飛行機から第一線に落すのだと思い、無事に兵隊さんの手に入ることを祈った。ハンダ付けの検査は厳しかったように覚えている。

熱海線の八名は紅茶部で、アルミ皿に紅茶を分けて、入り混じっている茎をピンセットで取り除く作業だったとのこと。他に粉末の薬が造られていたようで、内服薬の包装に携わっていた班もあった。

或る日、近くの森永乳業工場に招かれて一回で見学し、カルピスも馳走になった。御殿場線他、十二名の友人たちが働いていた。牛乳を遠心分離機にかけてカゼインを造り、糊が出来て飛行機の接着に使われる由、粉ミルクやカルピスも造られていた。あとは、血液をステンレスのような板に流して乾燥させ、こそぎ取って粉にしていたとか。食品工場で、何か催しがある時は乳業の学徒も合流した。

朝礼、屋敷、終礼は遠藤工場長をはじめ課長、主任、工員、先生、学徒みな一堂に集まった。その頃の私たちの愉しみは、屋敷後二、三十分位の休憩時間に遊ぶピンポンだった。また、声量のある根津主任から「オーソレミオ」「帰れソレント」などの歌を、前庭へ出て教えて頂いて合唱した。

森永の会社は、家庭的なよい職場であった。後日わかったことは、戦時中、森永は陸軍糧秣廠の指定工場になっていたとのこと、因みに糧秣とは「軍隊で人と馬の食べ物のことをいう」と国語辞典にあった。

ベニシリン部門へ 十月下旬、来春卒業してからの進路について調査があった。家の農事づくりに講習を受けて代用教員になる人、幼稚園に勤める人、熱海線の人たちは近くへの勤務が希望だった。私は、また父の転勤もあることだし、このまま二十名位の友人たちと、挺身隊として森永工場に働くことに決めた。

一カ月たって私たちは、ベニシリンという、我が国で最近研究開発された驚くべき効力のある新薬品の説明をきいた。その少し前に新聞紙上で目にしたことを思い出した。私たちは工場

で新たに生産に入るベニシリン部に移った。利岡主任の下で須原さんと私は「効力検査」の役をいただいた。俄に仕事は変わって試験管の洗浄、乾燥、滅菌から始まった。前にも増して生き甲斐のある工場生活となった。

ベニシリンの効力検査(ナンバー二三三、一七六)の工程は、青黴の特別な菌株を培養液(ペプトン、ブ

イオン他)に植え付け、青カビをしっかりと生育させて培養液に分泌された成分を特殊な技術で抽出・精製する。これが多くの病気に関わる化膿菌(ぶどう球菌)を阻止する医薬品となる。

私たちの効力検査は、菌を植え付けた後、一週間余りたった培養液から、ビペットで10℃位採取して効力を調べた。毎日午後二時頃から滅菌室に入った。三十坪位の保温室で50×25×30㎝位の大きな木箱が、ねかせて並べられ整然と何段も積まれてあった。木箱の中はカビ培養中の場が七、八本位づつ、横にされて細い枕木を当てて並んでいる。場は元シロップに使用されたスマートな形のもので、培養液を半分以下に入れ、菌を植え付け(賀川安代さん、驚栗もと枝さん、他十名位の学徒で)後に滅菌室

で寝かせる。場は横にするのが得られ、一週間も経つと、青緑色のカビが美しいビロードの布の様な感じで、長い隋円形となって五耗位の厚みで浮かぶ。カビの裏は下から見ると玉子焼の様に見える。色かった。

須原さんと私は、菌種(ナンバー二三三、一七六)はか)や植付日などを見ながら、効力のありそうな、よく生育している何本かを

選んで、その黄金色の溶液を試験管に採取した。室に持ち帰って菌種別に試験管に立てて、それぞれ二十倍、四十倍、八十倍、百六十倍、三百二十倍の希釈液を造り、ビペットでぶどう球菌を一

滴ずつ落とし、その都度、試験管の口、綿棒もアルコールランプにかざして滅菌し、必要な数字も記して、室内の保温器(家庭冷蔵庫の二倍位)に入れた。希釈の倍率も利岡主任の指示でもあった。

また、ある日実験用のマウスが五、六匹届けられ、私たち二人が世話をするようになった。

効力検査室は工場で唯一の二階に位置していた。毎朝工場に着くと、二人は奥まったところにある十数段のコンクリート階段を急ぎかけ上り、鍵を開けて目ざす保温器から、試験管立てを取り出して、前日の効力検査の結果を確かめるのが楽しみだった。予想が当るかどうかが陽にかざして見て、液が透明ならベニシリンの勝、濁っていたらぶどう球菌に負かされたことになる。たまに倍率の分け方によっても、全部の試験管が透明でぶどう球菌を阻止できた時は、もう一段階上も

やればよかったと残念がたりもした。

毎月、東京三田の森永本社より稲生専務(現森永製菓株式会社相談役)がペニシリン研究者の帝國大学の相沢、梅沢両先生ご兄弟(共に三十代、のち博士。梅沢浜夫先生は微生物研究で文化勲章受賞)と見られて遠藤工場長の案内で、ペニシリン生産の過程を見て廻られた。

森永食品工場には、ペニシリンの製造にあたり、色々生かせる設備、器具があったから陸軍の指定工場に選ばれたのだと思った。

日を追うごとに工場内は大量生産の活気に満ちた。お正月休みの前には、一同お餅など青カビの出た物があつたら持つてくる様に言われた。

◇ ペニシリンの精製

精製は試験部の二部屋でなされた。大橋主任、八木主任(鶴見工場から見えていた)の下で学徒二名、女子社員二名が手伝っていた。用事が入った時、目新しい幾つかの装置があつて、濃い黄色のペニシリン液が精製されてくるのが見られた。屋敷時食堂で、精製に当っている瀬川さん、秋山さんと一緒にテーブルに着いて見ると、手指、手の平まで真黄色に染まっています、その独特の匂いも落ちないよ

◇ 昭和二十年

ペニシリン生産も軌道に乗って、工場一丸となって、それぞれの持ち場で働んだ。が、昼間も米機が襲来するようになり、度々防空壕に待避するようになった。

三月、私たち学徒は女学

川柳

高井喜雄

ショーを見る結婚式の味気なき
産湯から納骨までも酒がいり
健康でなければ出来ぬ医者通い
電話帳まだ生きている故人の名
しびれてはお経も只の声となり

校四年修了の卒業式を挙げた。前日、森永の工場で、卒業祝の歡送会を半日かけて開いて下さり、工場屋内の会場は紅白の幕を廻らさ

れ、舞台も客席も用意して下さった。工場側も学徒側もそれぞれに、出し物があり、私たちの大分前から稽古を積んでいた「歌う狸御殿」であった。この歌劇は何幕もあるので殆んど全員の学徒が出演した。リーダーは歌の好きな中村さん、前島鈴子さんであった。これは前年の秋頃、宝塚少女歌劇の映画化されたものを、皆で何回も見ていた。もんぺ姿時代の戦争中に、この様な豪華な夢の世界があるのかと、信じられない気分だった。主役の俳優宮城千賀子は美しい若殿だった。私たちの配役は、若殿が前島さん、お姫様と白木蓮の精の二役を中村さんが演じ、美しく声量もあつてなかなか圧巻であった。

何人かのお姫様たち、白木蓮たち、狸さん、奴さん、御殿女中たち、其の他明るい「狸囃子の歌」や「元禄花見踊」の曲などに乗って、次々に舞台に出て踊っては交代した。衣裳もいろいろと見事に工夫されて、随分見映えのある楽しい劇になったと思う。

工場の主任さん方は、一面

白い替え歌を披露して、一同を爆笑させたり、歌の上手な方が独唱して下さった

り、手品も出たりで愉しい時を過ごした。その日で森永の工場を去る友人たちは、今まで家庭的にあたたかく仕事をした、皆様とのお別れを惜しんだ。

やがて四、五、六月とすみ、日本国内は東京をはじめ、あちこち空襲を受けて焼失していった。私は工場から六時半頃家に帰ると、毎日のように警戒警報発令で火も使えず、食事もゆっくりとせず、休まずで、神経戦で攻められる思いだった。でも若さで翌朝には、また張りきって森永に通った。

七月一日、父が川崎駅長に転任となった。川崎は既に四月二十四日の空襲で焼野原になっていた。東海道線が通るので取り敢えずバラックで、駅がわかる様になつて由だった。父は沼津から川崎駅へ通勤した。空襲警報で帰れない時は、三軒茶屋近くの兄弟の家に泊まった。川崎駅長官舎は焼失しているの鶴見の民間の家(疎開して空いた)が官舎になる由、私は森永の会社に申し出て、七月上旬に後髪を引かれる想いで退かせて頂いた。

この頃、東京陸軍幼年学

校二年在学中の弟が、一年ぶりに一、二泊の休暇で帰宅した。力強い数々の軍歌を、私たちが一緒に歌った。

七月十日頃、沼津市内に米軍機より沢山のビラが撒かれた。便箋位の大きさの薬半紙を横にして、丸いチャブダイが画かれてあり、左右に男の人(中国人の様に髪を長く編んで八の字髭がついていた)と子供が坐っている。お膳の上には一人一人に御飯をてんこ盛りにした茶碗と箸が置かれ、お皿にはお頭付きの魚が何尾かのついている。「戦争を止めたら此のように御飯が食べられる」と書いてあり、私たちにとても信じられない事であった。でも近所

の家を見に出た。茶の間の羽目板に黄燐焼夷弾が刺さって燃えている。水をかけて家の中に土足ごとあがる。押し入れを手早く開けて焼夷弾の確認、再び米機の襲来、ガッザツ、パラパラパラと落ちてくる音、私たちは声をかけ合つて再び防空壕へ。米軍機の編隊は、上空を廻つて来て落とすと十五分位で引揚げ、また十分足らずで新しい編隊が来る。その周期が判つてきたので、私たちが飛び出たり飛びこんだり。

二度目に家を見に行った時は、風呂場のコンクリートのたたきに小型爆弾が突

イワシが獲れると 伊豆半島が上昇する

友田好文

日本近海のマイワシの漁獲が、時の経過とともにどのように変化していくかのパターンは、伊豆半島の上昇のパターンとよく似ています。大正一二年(一九三三)は、関東大地震が発生した年ですが、この頃から、それまで静かであった伊豆半島が上昇を始めます。このことはそれほど不思議なことではないでしょうが、同じ頃から、太平洋のマイワシの漁獲が急激に増え始めます。昭和五年(一九三〇)には北伊豆の地震が発生し、伊豆半島は上昇し、結局は四〇センチメートルくらい上昇するのですが、ちょうどその期間中、マイワシの漁獲も増え続けています。

イワシは昭和一二年(一九三六)をピークとして、急激に減少し始め、やがて日本近海からその姿を消したように見えます。と同時に伊豆半島にも平穏な日が訪れます。イワシは獲れないけれども、相模湾の海底も静かになるのです。

昭和四五年(一九五〇)頃からマイワシの漁獲が増え始め、その増加は現在も継続中ですが、ちょうどその頃から伊豆半島および相模湾は再び活発な活動を始めることとなります。

そして伊豆半島沖地震、伊豆近海地震、大島の噴火、三宅島の噴火と事件が多発してきます。伊豆半島の上昇——正確には、熱海に対する伊東の上昇ですが——は現在も続いています。

地震予知のために地味な測量を続けている方々は、いつ上昇が静まるのかと頭を痛めています。魚を獲る方々も同じように頭を痛めています。獲れ過ぎたマイワシは冷凍庫に収められるのですが、どのくらいか容積の倉庫を用意すべきかの予想がつかないのです。

長い期間を平均して大局的に見ると、イワシの漁獲とアジのそれとは逆の関係にあるようです。大島の噴火以来、アジの漁獲が少しずつ増えているので、したがってマイワシの漁獲は減り始め、伊豆半島の上昇もやがて止まるかもしれません。

△相模湾のアジ▽
相模湾における各種の魚種の漁獲と地震との関係を見てみようという気になったのは、大島の大噴火のときです。噴火の調査に出かけた方々から「アジのたたきがただみたいに

安い」という話を聞いて、とたんに寺田寅彦の「地震活動と漁獲」という論文を思い出しました。昭和五年(一九三〇)、北伊豆に地震が群発しましたが、小さな地震の活動の一年間の消長を見てみると、その月のアジの漁獲の消長ときわめて良い相関をもっています。この論文を思い出して、さっそく神奈川県の水産試験場で、相模湾周辺の各種の魚の漁獲の資料を、「魚を獲ることを仕事としている人に迷惑になるような結論を出すようなことはしない」という条件でお借りしてきました。約一四年間の資料です。

その結果、面白いことが見つかりました。伊豆半島および相模湾が再び活動を始めるきっかけとなった伊豆半島沖地震の一カ月前の四月、やたらにイワシが獲れたということ、地震のあった月には何処かに隠れてしまったということ。これと、大島の大噴火のときにアジが豊漁であったことを合わせて考えて、こんな風に考えてみました。相模湾のような海底が活動を始めたなら、きっと海底から温泉も湧きだすでしょう。そうしたら、温かい水を好むアジは集まってくるし、冷たい水を好むイワシは立ち去るでしょう。こんな単純な考えを話すと、「魚がなぜ増えるかなんて全く分からないのですから、何をいっても結構です」ともいわれるし、また「生物なんてそんな単純なものではないので、しろうと

は、だから困る」ともいわれました。ついでに、バナナワニ園のワニが大島噴火の前夜吼えたとか、大島のカラスが何処かに行ってしまった、それはなぜかなどと問われるのですが、ワニやカラスの場合は、ナマズと同じように、第六感で危機を読みとったのでしょう。アジが現われたり、イワシが逃げたりするのは、海あるいはその底の短期的な環境の変化でしよう。日本近海でイワシが増えたり減ったりするのは、もっと長期的な環境の変化で、それには餌の量が深く影響しているのではないでしょうか。(ともだ よしのぶ 東海大学海洋学部教授・東京大学名誉教授 地球物理学)

(編者註)

この文は、友田先生が「あなたと地球」と題して東京大学出版会PR誌『UP』に執筆(連載)されたうちから一九八八年一〇号の分を抄録したものです。

先生は、漁獲と地震活動との関係の他に、地震のいろいろな自然現象について研究された方々の説を「あなたの地球」で紹介されています。

なお、本誌に転載を許可下さるに当って、先生は「私の本来の仕事ではないのですが、最近の学門の分野が余りにも専門に分かれ、お互いの連絡がみられない現状なので、種々に分離した専門分野の連繫につとめております。漁獲と地震活動の問題も、このような見方でとらえたものです」というお返事を頂きました。

明治以後 小田原劇場物語 (二)

石井富之助

2 富貴座 (幸座・若竹座)

江戸時代には藩の定めで藩士は一切観劇を禁じられており、また町の中に劇場を建てることも許されていなかった。劇場は桐座の一座だけで、相撲も町はずれの大稲荷神社や法授寺の境内に限られていたが、明治二年七月四日始めて町の中央に劇場が建てられることになった。片岡永左衛門著『明治小田原町誌』には「玉滝坊維持のため境内に劇場建築の公許を得て上棟す。しかれども開演の月日は詳かにせず」とこのことが記されている。玉滝坊というのは小田原の総領守である松原神社の別当で、北条時代に逸早く鉄砲を小田原へ移入したことで知られている。

また、この劇場建築公許については河野桐谷編『江戸は過ぎる』に集録されている、赤松則三の「箱根越えの御鳳輦」という談話の中に、明治天皇の御東行に關連して次のような面白いことが語られている。

(前略) それで小田原へ御着きになりましたが、この御所車を本陣にも置くわけに行き

ませんで、明神(註・松原神社)の傍に宮小路の芝居小屋と言つて、臨時の芝居小屋があった。ところが臨時に造つた芝居小屋で掘立柱ですから前の方の柱を引つ外づして、そこに御所車を入れました。そこで、御所車を入れたとい

うので、芝居小屋があすこに許されました。その前には小田原には、千両役者の来るのは寺町に桐座というのがあって、あれより外芝居は出来なかつた。それが御所車をお入れ申したというので、あすこに許されました。こうして劇場が出来たはずなのにその後のことについては全く不明で、『明治小田原町誌』を辿つて行くと、明治十四年十一月十一日劇場若竹座落成、明治二十三年一月三十日宮小路若竹座より出火、三十三戸焼失。

この記事があるだけである。ところが明治二十三年二月発行の『函東会報告誌』はこの若竹座火事を

一月三十一日午前二時十分、幸町一丁目劇場幸座より出火

百二十戸を焼く。と報じている。勿論当時の雑誌の方が正しいと見るべきで、また他の資料から見ても最初の座名は幸座であったことが知られる。

幸座は焼失後しばらく再建されなかつたが、明治二十六年五月、名も若竹座と改まり開場式を行なつた。座主高田儀二郎、建元若竹兼吉であった。若竹兼吉は大工町に住み、名人とうたわれた縫箔屋で、おそらく座主から経営を任せられ、それで自分の苗字をそのまま座名としたのであろうと思われる。

若竹座は間口十間、奥行十六間の小屋で、舞台間口七間半、奥行四間半、廻し舞台四間、せり出し四尺九尺、花道四尺六間、七三スッポン、二階に道具、衣裳、床山、三階に楽屋、客席は三方棧敷というものであった。

また、柿葺落は沢村淀五郎、市川団之助、嵐鱗花一座で、出し物は、寿式三番叟、八大伝、彦山権現誓助剣であった。この若竹座は開場してから三年後の明治二十九年に至り、座主が變つて宮の前の料亭「集月」の主人高杉熊次郎(後に高杉安蔵)となり、座名も富貴座と改められた。以後富貴座は大正四年六月に活動常設館となるまで芝居小屋として経営されたのである。

富貴座は、先にも述べたとおり、小田原の総領守である松原神社と同じ宮小路にあり、花柳界、繁華街にとりまかれ、しかも魚河岸とも隣接していた。御府外にあった桐座が次第に経営不振に陥り、このような優位を占めた富貴座が繁栄したのは当然のことであつたと言わなければならぬ。

富貴座は小田原を中心として各地を巡業していた沢村淀五郎、市川島三郎、松本錦升、嵐芳之助、中島伝幸、新派の佐藤幾之助などの各座をかわるがわる興行しているが、それらを除いて主な興行を挙げればのとおりである。

- 明治三十一年、大魔奇術松旭 齋天一、天二、天勝
- 明治三十三年、大奇術大魔術 松旭齋天一、天二、天勝 三日間
- 明治三十九年二月、大奇術松旭 齋天一 一行
- 明治四十二年、浪曲桃中軒雲 右衛門 三日間
- 同 浪曲京山小円 三日間
- 同 奇魔術松旭齋天勝 三日間
- 同 大正元年、吉田奈良丸
- 同 坂東鶴之助一座
- 同 佐倉宗吾、鎌倉三代記
- 大正二年、芸術座
- 同 松井須磨子、沢田正二郎、中井哲、倉橋仙太郎

。カチニューシャ
大正二年夏、尾上菊五郎一座
。尾上菊五郎、尾上菊次郎、尾上栄三郎、市川男寅、中村翫助
。市原野、源平布引滝、新皿屋敷月雨量
大正三年、東家楽遊、東家楽燕

同 松旭齋天勝
同 東家燕二郎披露興行
。東家楽遊、東家楽燕、龍甲齋虎丸

3 鶴 座
明治九年にもう一つ旧茶畑に劇場ができた。座名を鶴座と称し、座主は一藤不龜吉、道了さんのような力持ちというところから道了龜と異名をとつたほどの人だった。鶴座はあまり大した芝居をやっておらず、多分旅廻り一座の常打小屋として経営されていたと思われるが、たつた一つだけ、演劇史上に面白い話題を残している。

それは川上音二郎一座の乱闘事件である。この事件は川上音二郎の研究や物語で相当広く知られているが、小田原に残っている資料あるいは古老の見聞等についてはほとんど紹介されていないのでそれらをもとにして記して見ることとしよう。桐座のところで述べたように、川上音二郎が横浜の萬座を打ち

あけて、桐座に来演したのは明治二十四年三月下旬のことであった。「桐座記録」には桐座、鶴座をひっくり返してその出し物が掲載されているが、サンデー毎日第十六巻五十七号の大衆文芸所載、冬木憑作「書生芝居」には

二十一日、大入初日小田原桐座に於て、宿、小屋
狂言、「板垣君遭難実記」

八幕
「オッペケベ」

二十五日、中止を命ぜられる
二十七日、芸題替

狂言、「大井憲太郎氏国事
犯顛末」

大切「オッペケベ」
三十日、場所替、休場

四月二日、小田原町茶畑鶴座、
返り初日

狂言、「西郷隆盛善勢力」
「島田一郎梅雨日記」

是も亦中止を命ぜられる。
「経国美談」を一日

限り出す。
五日、芸題替

狂言、「蟹気楼将来の日本」
切狂言「五大州」

となつてゐる。
それはともかく、武骨な書生

が芝居をやるというので物珍らしさも手伝つて、初日から大入

満員の盛況であった。
川上は「板垣君遭難実記」の
幕間に陣羽織、赤の鉢巻、日の

丸の鉄扇を持つて舞台上に現われ、滑稽漫談のような事を一席ぶつて後、例の「オッペケベ」を謡つたという。

「桐座記録」には、この頃五つを書きとめてあるので、その中の二つを紹介しておこう。

「権利幸福嫌いな人に、自由湯をば吞ましたいオッペケベ、オッペケベ」

ポウポウ、かたい袴かど取られて、マンテルズボンに人力車、いきな束髪ボンネット、貴女に紳士のでたち

で、うわべの飾りは好いけれど、政治の思想が欠乏だ、天地の真理が判らない、心に自由の種をまけオッペケベ

オッペケベポウポウポウポウ
ウポウ
「米価騰貴の今日に、細民困窮見返えず、日深にかぶつた高帽子、金の指輪に金時計、襟門貴頭に膝を曲げ、芸者太鼓に金をまき、内に

は米を蔵に積み、同胞兄弟見殺しか、幾ら慈悲なき慾心も、余り非道な薄情な、但し冥途のお土産か、地獄で閻魔に面会し、賄賂使つて極楽へ、行けるかえ行けないよオッペケベオッペケベ

ベッポウベッポウポウ
川上が「オッペケベ」をやり、次の幕間には青柳捨次郎が自由民権や政府攻撃をやる。ちょう

ど五日目というから、先の「書生芝居」で中止を命じられた二十五日に当るわけだが、青柳が例によって演説をやっていると正面二階客席から「ノオノオ」という声がかかり野次がとんだ。座員は営業妨害だと怒つてその客を舞台へ引ずりあげ客席へ向つて陳謝させた。これが事件の発端である。

客は公衆の面前で侮辱されたことを大いに口惜しがつて壮士の神保佐一郎、松本貞治、三輪啓助、星崎広助、杉山定治等に仕返しをしてくれるように頼んだ。神保佐一郎は後に東海新報社長、星崎広助は豆相新聞社長になった人であるが、当時はいずれも血気盛んな者ばかりであったから、ヨシツとばかり引き受け虎視眈々その機会をねらつていた。

ところが川上一座は警察の弾圧がいよいよ厳しくなつて、三十日に至りついに休場。四月二日、小屋を鶴座に替え返り初日の幕をあげた。今度は夜芝居であったが、これもまた中止を命じられた。そこで五日芸題替で「蟹気楼将来日本」を出したが、その幕間に例によって青柳が演説をぶつた。磯部平七氏の話によると、演説で警察をさかんに罵倒した上に、方位の暗剣殺を暗警察とやつて退けたので、た

まりかねた臨検の警官が中止を命じ、青柳を引致しようとしたのだという。これがきっかけになり、ついに座員と警官の乱闘が持ちあがつたが、応援の警官が駆けつけたので騒ぎはいよいよ大きくなった。その夜も客席にきていた壮士連は、これを見ると好機到れりとはかりどつと乱闘の中へなだれ込んで川上方に襲いかかった。そこへまた、かねてから川上に好意を寄せていた菓子金ちゃん(後の町会議員山口金太郎氏)という威勢のいい兄ちゃんがとび込んで、青柳を引致しようとした警官をなぐり倒す。さらに川上びいきの魚河岸の兄ちゃん連も加つて壮士連を叩きのめすというわけで、鶴座は大修羅場と化したのだ。

そして、川上音二郎、青柳捨次郎、若宮万二郎、菓子金は旧牢屋町の牢屋へ入れられ、直ち公判に附せられた。

毎日牢屋町から幸一丁目の裁判所までの道筋には、川上に声援を送る者あるいは大勢の野次馬が出かけ、そのために露天商人が店を並べたほどだったという。川上の弁護士は中田寿一郎氏(後の町長、図書館初代館長)であったが、その努力が実つて川上は無罪、青柳は官吏侮辱罪で重禁固二カ月という判決だった。

これに対し、検事が控訴したので、川上は横浜へ送られたが、ここでもまた無罪の判決が下つたのだ。

川上はこの二度の無罪を大いに喜んで、「無罪又無罪」と大書した旗を先頭に押したてて市中を練り歩き、声援を感謝したのだったが、横須賀興行の後、東京鳥越の中村座での東京進出興行が連日満員の大好評を博した陰に、この乱闘事件が大きな宣伝の役をになつたことは疑いのないところであらう。

川上はこの中村座興行から成功の途を嚮進しはじめるのだが、明治二十五年再び小田原へ来て壮士連と和解したということである。

鶴座はこのような興味深い話題を持つているが、明治二十八年頃焼失し、その後再建されなかった。古老の話では、その時鶴座に日清戦争の芝居がかかつていて、海戦の場で煙火を使つて船火事を見せた。その火が舞台にうつつて焼けたのだということである。

これに対し、検事が控訴したので、川上は横浜へ送られたが、ここでもまた無罪の判決が下つたのだ。



相州上曾我村瑞雲寺 開基争論記(三)

西山 銈太郎

十一月十二日通帳写

一 本多八三郎
右御吟味願之儀當時寺社奉行松平伊豆守吟味中ニ候処別紙之通申越候間開基と申證據ニ可相成書類有之候ハ、篤と取調明後十四日九ツ時迄ニ松平伊豆守方江可差出旨相達可申段勝三郎殿より申来候依之右證據ニ可相成書類取調差出候様御申達可有之候尤證據書類取調差出候有無之儀者明日中勝三郎殿江可相届旨申越候間明屋頃迄ニ拙者方江届書差出候様取計可被申候則伊豆守より之別紙写相達候写之上返却可有候以上

十一月十二日

寺開基と申立候證據書付類等有候ハ、明後十四日九時迄拙者方江可差出旨八三郎江御申渡有之候様致候

十一月十二日

右十二日夜八時前申来翌朝八三郎方江相越書類取調別紙之通相認權兵衛殿江為見候処猶又勝三郎殿江為見致寄無之候ハ、明日伊豆守江可差出旨御談有之勝三郎殿江持參用人田口九十郎江談勝三郎殿江一読相濟致寄無之間差出候様被申候依之翌日逢対席ニ而同役相談之上少々時日之文面差略左之通伊豆守江差出候処山田清太夫請取猶又同人申間候者瑞雲寺開基之儀是迄八三郎代々之内其頭向江申立置候儀有無其書面ヲ以可申間由并別紙書拔本紙可差出段申間候

本多豊前守信親
屬相州小田原大守北条左京大夫氏康相模守氏政領相州曾我郷中村郷為一方之將諸子十騎弓足輕五十人預之甲斐信玄と合戦之砌為軍功之賞相州黒岩郷領之舍弟本多出羽守相共ニ勳軍功天正十五年亥四月二日卒相州上曾我村ニ送葬龍珠山瑞雲寺母佐々木左馬助娘

書付 本多八三郎

覚

十一月十二日 被仰下候趣奉
得其意候且違書写迄通奉
請取候以上
十一月十二日 加藤栄助

違書写

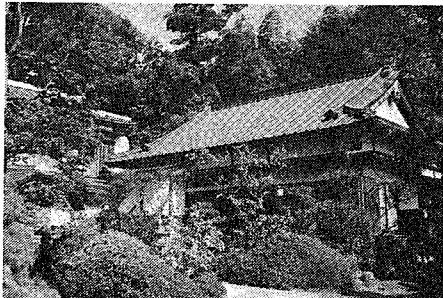
松平伊豆守

相州上曾我村瑞雲寺寛高不埒之取計いたし候由を以奉行所吟味之儀御組本多八三郎申立之趣ヲ以責様より下野守殿江御申立之書面御同人御渡有之寛高者當時吟味中之処八三郎方ニ而瑞雲寺

相州上曾我村瑞雲寺儀ニ付先祖豊前守開基と申立候證據書物等有之候ハ、差出候様御達之趣奉畏右取調候処先祖より有之候書付之内別紙之通認有之候外旧

書付 本多八三郎

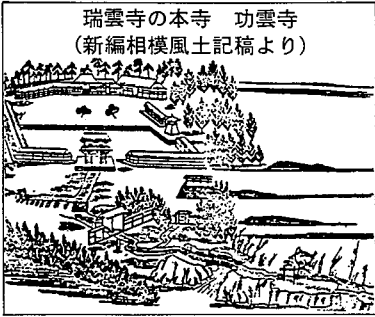
覚



瑞雲寺庫裡

相州上曾我村瑞雲寺儀私先祖豊前之守開基之儀代々之内其頭向江申立置候儀有之哉之取調候処明和以前之諸書物者先達而申立候通焼失仕別紙之外書留等無御座候祖父左衛門父八三郎代申立候書留等相見不申私代ニ相成候而茂頭向江申立候儀無御座候併龍珠宗洞者私先祖ニ相違無御座候処寛高如何之趣意ニ而位牌削取候哉対先祖申訳茂無之何共歎數儀ニ付家来差遣寛高江再應及掛合候処我意而已申募取敢不申候故無據申立候儀ニ御座候尤御吟味願ニ茂申上候通強而開基

之議論仕候儀ニ者無御座候得共位牌削取候儀法外之取計ニ付不得止事御吟味奉願候儀ニ御座候此段申上候以上
十一月 本多八三郎
右書物写切紙粘入之様相見候
中奥先祖平姓家紋
三ツ頭右巴
丸立アオエ 本國武蔵
俗名豊前守
一 高曾祖父本多玄清入道常金
父伊勢國司北畠殿以旗下舟江城主本多美作守如紀母遠藤刑部少輔娘
豊前守常金屬國司家領北伊勢之地後下向於關東屬北條新九郎氏茂入道早雲助忠助舍弟小次郎後左京亮屬國司家其後尾張内大臣平信雄公有軍功嫡子本多千勝丸信雄公秋田配流之後任蒲生飛彈守氏郷奥州九戸陣功有テ討死
一 高祖父 本多豊前守信親
屬相州小田原大守北条左京大夫氏康相模守氏政領相州曾我郷中村郷為一方將諸子十騎弓足輕五十人預之甲斐信玄と合戦之砌軍功之為賞相州黒岩之郷領之舍弟本多出羽守相共ニ勳軍功皆川山城守同列天正十五年亥四月二日率先祖開基龍珠山瑞雲寺上曾我村送葬母佐々木左馬助娘
一 曾祖父 本多主膳正節親
屬北條平氏政氏直二代領相州曾我郷中村郷黒岩之郷都合三郷天正十八年小田原落去之節從家



瑞雲寺の本寺 功雲寺 (新編相模風土記稿より)

康公被 召出旨 御書兩度迄頂
戴仕候得共在所曾我郷ニ引込家
名相改罷在候処元和年中阿部備
中守正次依助成武州岩付江行寛
永廿一年申十二月廿三日病死龍
門寺葬天正年中小田原籠城之節
在所曾我郷夜討有之組之諸士下
知シテ防之首三ツ討取熊沢織部
此時討死母中村加賀守娘
右書面貳通十一月廿一日權兵衛
殿一晚内談有之勝三郎殿用人文
沢弥忠太江談松平伊豆守江差出
同人家来小田清太夫願候由申聞
尤兩所江書付写書付而通ツ、差
出候

差出候様同人より別紙之趣相達
依之申達候様勝三郎殿被申聞候
間相達候早々八三郎江申達右而
品可差出旨相達可被申候別紙写
差進申候
一 右御目付江差出候由緒書之
儀者寛政之度諸家系譜調有之候
節御目見以下之者由緒書御目
付ニ而取調有之候哉ニ承候弥右
之趣ニ候ハ、其節御目付江差出
候由緒書扣之方ニ而可然致候間
取調可被差出候夫共別段系譜を
差出候哉ハ、系譜之扣ニ而茂可
然哉何レニ茂篤と取調早々可被
差出候
右申達候以上
十一月廿五日
被仰下候趣奉得其意候且達書写
壹通奉請取候以上
十一月廿五日 加藤栄助
達書写
松平伊豆守
相州上曾我村瑞雲寺寛高御組本
多八三郎先祖法名削取候由之位
牌同人方江取寄有之候之趣ニ付
右位牌并八三郎由緒書御目付方
江差出置候扣有之候ハ、一同拙
者方江早々可差出旨御申渡有之
候様致候
十一月
右之通申来候ニ付八三郎方江罷
越由緒書取調候処御目付方突合
濟之由緒書不相見候間當春改替
之節差出候通西之内半切ニ認翌
廿六日權兵衛殿江位牌持參之処
御同人御留守ニ而市郎左衛門殿

一 統被致絵図面ニ写候由侶右衛
門申聞由緒書之儀茂談置候勝三
郎殿江茂同様持參致候御同人
御留守ニ而田口源蔵一統被致是
も與江持參致絵図ニ被写候由申
聞由緒書之儀突合之上ニ而差出
候様奉行所ニ而沙汰有之候ハ、
御目付所御廻シ有之候様談置伊
豆守江持參致位牌者小田清太夫
請取由緒書者突合相濟候上差出
候様同人申聞候故權兵衛殿江其
段申立候御同人右者此方より
筆談ニ而相送候而書取相違ニも
可相成依之直ニ勝三郎殿江持參
致候方可然と談有之候
一 廿七日朝八三郎来昨日之始
末申談勝三郎殿江由緒書持參宮
沢弥忠太江渡昨日源蔵江談置候
趣清太夫申聞之趣を以突合之儀
願置
一 十二月朔日覺左衛門鹿蔵来
一 十二月三日權兵衛殿より通
帳ニ而左之通申来
一 本多八三郎
右由緒書御目付方突合相濟勝三
郎殿より被相下候間相達申候八
三郎江相達可被申候
右相達申候
十二月三日
被仰下候趣奉得其意候且突合濟
由緒書奉請取候以上
十二月三日 加藤栄助
一 同日覺左衛門同人御竹松村
若兵衛来昨日伊豆守江呼出有之
瑞雲寺本寺津久井コウ雲寺呼出
有之本寺取計方尋有之且石碑取

替候儀尋有之処覺左衛門致不申
由申張候趣咄有之
一 同日由緒書請書致突合濟共
八三郎方江持參致參明日同人伊
豆守方江持參致候様申談置候
一 四日八三郎不快ニ付貞三郎
を以由緒書持參致候御小田清太
夫請取候由翌日左之通届權兵衛
殿江差出候
〔御届 本多八三郎〕
寛
私儀昨四日寺社奉行松平伊豆守
方江由緒書持參可仕処風邪ニ而
寒熱強難罷出候ニ付由緒書尾張
殿医師栗崎道栄弟栗崎貞三郎差
出候御伊豆守家来小田清太夫請
取候由申聞候依て此段御届申上
候以上
十二月五日 本多八三郎
右持參致以来名代之儀申談置候
様申上置候
一 十二月六日鹿蔵来昨日伊
豆守江呼出有之候御例と違候由
尤又左衛門も出候由訴所之様子
ニ而□寺社役之様子ニ而龍珠之
石碑瑞雲寺境内之内ニ候哉趣尋
有之候ニ付右之通之由一同答候
由申聞候
一 十二月下旬一同湯村被申渡
尤墓所見分として御代官江川太
郎左エ門手代柏木 村方江罷
越絵図面等并村役人より書付等
為差出候旨翌五年覺左衛門出府
之節申聞右絵図面書付写一読致
五年
一 正月廿三日覺左衛門兄弟来

去廿日着昨廿二日奉行所江一同
呼出尋有之趣申聞
一 同月廿七日寛高并外百姓共
一同呼出相手方対之外被叱候由
一 同二月八日呼出功雲寺代僧
不案内者ニ而尋之趣差支無之者
差出候様申渡湯村申付候由
一 三月五日本多八三郎并一件
之者呼出有之候御八三郎病氣ニ
付不罷出候ニ付一同引取申渡候由
一 三月廿一日今晚本多八三郎
呼出之病氣ニ付難罷出旨木村
三之助を以申来即刻權兵衛殿江
申立候御直ニ奉行所江罷越右之
段申達品々之義勝三郎殿江申立
猶又權兵衛殿江も申聞候様依之
奉行所江罷越小田清太夫江其段
申立候御快氣之上呼出可申旨答
有之右之趣勝三郎殿權兵衛殿江
申立達中神田佐久間町より出火
大火ニ相成候
一 四月七日呼出之御八三郎病
氣ニ付名代城戸富蔵差出候御名
代ニ而者不相濟候ニ而一同引取
候由
一 同月廿三日八三郎并一同呼
出吟味有之候由
一 五月十八日八三郎一件之者
又左衛門直七友右衛門半十郎仁
左エ門五人者同月六日口書ニ而
湯村申付今日功雲寺代僧寛高總
寧寺役僧寛左衛門一同口書之上
湯村申渡寛高者改役寺江御預被
成候由
一 七月十三日差紙ニ而同廿一
日着届廿三日呼出一件落差左之
通
(つづく)

打ち縄釣り・角鈎考(一)

それをとりまく人々



文と絵 隠岐 威重

この漁法はもう西湘の浜から滅びてしまった。敗戦後一時はまだ余命があったが、この漁法を伝える、いや、熱愛した老人達が馬鹿力を必要とするこの釣りに体力が続かず隠退し、そして死んでいくと、浜砂に海水が沈み消えていくように姿をかくしてしまった。

もう、かれこれ二十年も三十年もの昔になるかな。この釣り、漁具を愛し、自分では最後の伝承者だと自負している筆者、かつての若者も今は七十の坂を越える老人になった。西湘の磯浜に栄え、消え去っていったこの幻の釣りを、漁具・漁法を何かと記録に残すことも最終走者の僅かな責任・義務かと思えるのである。

昭和の初当、箱根の山からしげれ出た早川が相模灘にそそぐ川口の荒久の浜、もう海水浴客も去り人影もない秋の日がにぶく光る中に、澁柿色に塩焼けた羅漢様のような男達が数人う

ずくまり、とぐろを巻いて沖をじって眺めていた。いや、じっと、少しの波頭の変化も、一匹の魚紋も見のがさぬ鋭い視線を沖にそそいでいたのだ。一時がすぎた。男達には魚群が自分達のテリトリーから退いていったのを永年の経験から知っているのだ。

沖を見ていた男達は今度は車座に坐り直し、やおら各自の角鈎袋から自慢の鈎をとり出し自慢し、けなしあい、和氣藹々の話の中に燃え上っていった。だが、彼等が喋る言葉、会話の内容は土地者以外には殆んど通じない浜言葉、どぎつい漁師言葉で交わされていた。

その人物連を紹介しよう。甚兵衛もどきのうす汚れた上張りを着込んだ鉄材屋の主人。日露の後、旅順は二〇三高地の戦いで太腿部に盲管銃創を受け跛をひきずる老戦士。大正の始め、第一次大戦

の沈没船を引揚げ大儲けをした男。「俺はな、二〇三高地で死ぬのは馬鹿らしいから、弾が飛んで来る中で左腕を高く上げ敵弾の中にさらしても命は助かると思ってる、でも腕の代りこの足に当ってしまったよハハハ……」と哄笑する猛勇士。この男、大正の大震災の時も地震が一応おさまると、海が心配で、いや、もしかしたら大豊漁があるかも知れぬ。大魚が地震で岸に打ち上げられてはいないかと、釣具片手に余震の中を浜まで走ったとも聞く。

次は大工の棟梁、赤ら顔でいつも酒臭い息をばき、小さなダンゴのように丸々と肥え、たえず臍が天に向って笑っている老大工。この西湘の地に、東京辺から別荘造りに来る大金持をオートクイにする術は確かだが、漁技は不思議に下手だった。日長一日ぶらぶら遊んでい

る遊士。そして当時まだ大学在学中の若僧もその仲間。半分として加入を許されていた。

でもこの人の輪の中に、誠に他の連中とそぐわぬ一人の紳士がいた。この士も勿論常連である。いや、この士がいなければ、この浜の社交界はつまらぬ、うら淋しいものになったに違いない。

この士は、ぼろ儲けした鉄屋・大工・船主等々奇人遊人に極力あわせるよう、グループから跳上った存在にならぬように勉め、仲間と融合する内に自分の喜びを発見していった。その現れが士の服装にもうかがわれる。紺の半被(大工や鳶が着るハッピ)腰をくるむバッチも同類のもの、足を地下足袋でつゝんでいた。だがそのハッピもバッチも特注品であることだけが彼に許された贅沢であった。いただく帽子はもう三年も海風潮にさらされた表わら帽で貫禄を添えていた。

だがその古帽子の下の顔だけは彼の履歴をかくすことが出来ない。毎日の浜通いで日焼けはしているが鼻梁の通った鼻筋には独逸製の高級眼鏡で装い、その奥

の眼差なしは涼しく、時には鋭く、でも殆んど柔和に笑っていた。大正の頃、彼はハーバード大を出た、アメリカに朝鮮に大牧場を持った大金持。そんな遠まわしの言い方はやめた方がいい。彼の父は、いまM地所働が持っている丸の内のビル街、一昔は三菱ヶ原別名赤星ヶ原とも呼んだを所有していた赤星鉄馬氏であり、彼はその長男坊の喜介氏である。いうなればM地所の大株主ということだ。そんな彼が身分も金も誇らず、鼻にかけず唯一筋に釣りに、狩猟にと殺生道に、殺生仲間と溶け込んでいく姿を、彼をとりまく土地の仲間達は、自分の理想像を、あこがれを、彼の中に見出し、そしてあたたかく敬愛していった。

戦後、昭和二十六年の始め、世は戦後の大混乱の中、食うや食わずの世。筆者も大陸から裸一貫での引揚げ、東京で一旗上げべく小工場を営んでみたものの見事失敗、ホーホーの態で郷里に帰り、姉が守っていた家に転がり込み、やっと教職につき日々の微かな糧を得ていた。その糧の不足を補うために日曜にはささやかな寺小屋も開いていた。

丁度授業に熱が入る頃、

その頃もう製造中止になっていた大縄一張りの大切な漁具を年若い頃の筆者に呈してくれた恩人であるから。漁船を三三パイ持つ船主、船主とはいえ自身も海に乗り出し魚群を追う現役の海の勇士。

その勇士につれそう如く小舟一パイを持つ老漁師。不思議にこの無口の老人はアミノノが上手で暇さえあれば毛糸の玉から妙なる彩りのセーターを上手に作る。現にそのえもいえぬ色のダブダブのセーターで裸の上半身をつつんでいた。「藤三丸にしろ、金太にしろ、オメエ達は毎日沖で魚を追っているくせに、陸に上ってまで俺達の分の魚を取り上げようとする。極道ものめ、そんなに魚を殺すと地獄に行くぞ」

「何をぬかす、主達があんまり下手だから俺達が助けてやっているんだ。ホレ、あそこはイナダの一本驢だ。ソレイケ」

老船主の指さす先にはかもめが一羽悠然とまっていた。「また人をかつか。承知しねえぞ……、ひねりつぶすぞ」上州訛りの角力取りくずれの大男、角力にみきりをつけ、この地に流れ込み髪ゆいの亭主におさまり、

「また人をかつか。承知しねえぞ……、ひねりつぶすぞ」上州訛りの角力取りくずれの大男、角力にみきりをつけ、この地に流れ込み髪ゆいの亭主におさまり、

「また人をかつか。承知しねえぞ……、ひねりつぶすぞ」上州訛りの角力取りくずれの大男、角力にみきりをつけ、この地に流れ込み髪ゆいの亭主におさまり、

「また人をかつか。承知しねえぞ……、ひねりつぶすぞ」上州訛りの角力取りくずれの大男、角力にみきりをつけ、この地に流れ込み髪ゆいの亭主におさまり、

「また人をかつか。承知しねえぞ……、ひねりつぶすぞ」上州訛りの角力取りくずれの大男、角力にみきりをつけ、この地に流れ込み髪ゆいの亭主におさまり、



庭先に決って赤星老が現われる。老も退屈なのだ。老の邸はニワカ教師の住む諸白小路の隣りの天神小路にあった。魚が魚礁をめぐるように、教師の矮屋も老の順回路の一つになっていたのだ。

縁先に坐し、拙妻と語り出し、早く生徒を追い帰し、己と話せとのサインを送る。教えている教師も気がそぞろになり、寺小屋の小児を適当に追い帰し語りの席に坐り込む。

アメリカの自分の牧場で空缶を高く投げ上げピストルでポカンと打抜く話、今度は缶を棚の上に一列に並べパンパンと打抜き、最後の一缶はくると一廻りし、とどめの一撃で仕上げをする美事な西部劇もどきの語りの射撃。馬の、牛のロデオの話。獺犬の仕込みの話。

食うや食わずの空腹、芋砲ですごすのよ。今の時代、宮様方でも何かとお仕事をなさっているのに、妻はさかしいわ……」そう申された奥様の気持は分らぬでもないが……。

敗戦で天と地がひっくり返った時代、一億国民新円をあさり、闇物資を何とか握ろうと大騒動のうち、一人ぐらゐ悠然と昔の大金持の襟度をくずさず生き抜いている姿には逆に痛快さをも感じた。また、ある日、昨日石橋と保土谷ゴルフにいったと申された。

「東洋経済の石橋さん？」

「そう」堪山氏は当時まだ首相になっていなかった。なお赤星老の長女は石橋家の長男に嫁していた。

ゴルフの話がはずんだ。保土谷でよく陳清波をキャデーに使ったとか。

喜介、四郎、六郎赤星三兄弟は初期の日本ゴルフ界の花であった。六郎氏はアマでプロを制して天皇杯を手にした唯一の人。四郎氏は後にゴルフコースの設計をやった。

「宅は一生を釣りと鉄砲ですごすのよ。今の時代、宮様方でも何かとお仕事をなさっているのに、妻はさかしいわ……」

戦前の軍靴の音、戦中の混乱の中も、敗戦後の、一つあやまれば共産化、少しめくじらたれば社会主義の世に変わるおそれのある中、超然、悠然、欧米流の大地主、貴族の姿を模する姿は立派と申す以外はなかった。

「僕、大学でデュボンの息子と同期だった」

「デュボンて？ ナイロンのデュボン？」

「そう」

戦後東レがデュボンからナイロンの特許を買って、それが当り日の出の勢いであった。

「あの時は面白かったな、君が犬に囲まれてペソをかいて助けてくれといったのには——、でもあの時の鱈は大変うまかったぞ。お礼を言うよ」

「旦那、それは云はないでください。言いつこなした……」

藤三丸は日焼けした顔の前で荒くれた手を振り、シワガレ声でうめいた。

早朝まだ日の上らぬ川口で藤三丸は一人で大縄を打っていた。その日はめづらしく大鱈が三匹も釣れた。得意になった老船頭はその魚を持ってA老邸に自慢におもむいた。

くぐり戸をあけ庭に入った。庭には夜の間だけ放し飼いになっている大きな猪犬が数頭いた。急に無断の闖入者、しかも大きな魚を三匹もぶらさげた怪人を犬達は無言でとりまいてしまった。

あの時の十分は一時間にも思えたぞ」

こんな愉快な会話が交わられてしばらくして、今度はA老が打ちしおれた姿で筆者宅に現われた。

「娘達が俺達老夫婦を小田原に置くのを心配してな、もしものことがあるといかないと、東京に來いというのだ」

「東京はどちら」

「田園調布」

「いい所じゃあないですか」

「いやだよ、小田原のこの辺が一番いい。店屋も近いし、家内は喜んでいゝ。それに山も河も海にも近い……、でももうあちらに娘達が家を用意してしまっただけだ」

その少しあと、山に海に生きたこの老紳士は泣く泣く都の雑踏の巷につれさられてしまった。

A老がこよなく愛したこの土地、この土が生んだ殺生好きの、A老に熱い敬愛をそそいだ取巻き連に手厚く形見の品を分けて去っていった。筆者にも何かと言はれたので、英国製の最高級銃パーダーを所望するわけにもいかぬので、氏が永年大切に蔵していた角鉤三本と、これも永年熟読していた米国のスポーツ誌フィールド&ストリームを多数割愛していただき筆者の貧しい書棚に花を添えた。(続)

釣りに、鉄砲に、ゴルフ。

六郎氏も大縄打ちの一派で一時荒久に住んでいたが、新橋大学の美形を奥さんにし、二宮に居を移したので、筆者達の仲間からは少し遠い存在になった。

「株と云っていたよ……」

「株？ M地所の？」

「いや、違ふようだ。日本の株でなくアメリカの石油の株のようだ」

と云われてみればうなづけなくもない。どのような方法で送金されてくるかは知らぬ。詮索しても詮ないこ

とだが。

ある日、浜の社交の座の中、A老は藤三丸に向っていった。

「あの時は面白かったな、君が犬に囲まれてペソをかいて助けてくれといったのには——、でもあの時の鱈は大変うまかったぞ。お礼を言うよ」

「旦那、それは云はないでください。言いつこなした……」

藤三丸は日焼けした顔の前で荒くれた手を振り、シワガレ声でうめいた。

早朝まだ日の上らぬ川口で藤三丸は一人で大縄を打っていた。その日はめづらしく大鱈が三匹も釣れた。得意になった老船頭はその魚を持ってA老邸に自慢におもむいた。

くぐり戸をあけ庭に入った。庭には夜の間だけ放し飼いになっている大きな猪犬が数頭いた。急に無断の闖入者、しかも大きな魚を三匹もぶらさげた怪人を犬達は無言でとりまいてしまった。

庭の犬の気配に不信を抱いたA老は窓からその様を見、恐怖にふるえる老船主の難を危く救った。

「オメエその時小便をもらしたんべえ……」

「馬鹿こけ、でも俺は魚を放り出して逃げようとしたが、動くことも出来ねえ、

中井町井ノ口所在の 春日局の一夜門について

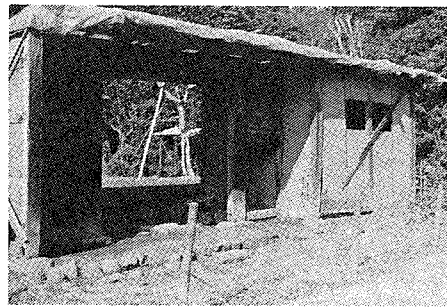
飯田 悟郎

三代將軍家光の乳母お福、後の春日局の出自については、幾つかの説があります。余程の事情があったのか局は緘黙して語らず、真相は不明ですが、一応の定説としては、明智光秀の重臣齋藤利三の娘として生れ、その母は光秀の娘だったとも言われています。謀叛人の血を引く者として、幼児かなりの辛酸をなめたようですが、乱後、京都の公家三條西家に養われ、縁あって小早川秀秋の臣稲葉正成に嫁し、その浪人後、二代將軍秀忠の長子竹千代君の乳母の募集に応じ、江戸の下って千代田城内にあること三十余年。後年は大奥総取締りとして、常に家光の背後にあって女傑の名をほしいままにし、食封は相模国高座郡吉岡村及び用田村(現在の綾瀬市吉岡及び藤沢市用田)を中心として三千石。かつての配偶者稲葉正成は幕府に召出されて常州真岡にて二万石。長子正勝は幼にして家光の小姓にあげられ、長じて下野佐野二万石。後に亡父の旧領を併せて四万石。又大久保家改易後に小田原城を与え

られ、八万五千石にまで栄進しています。その死するや、將軍の乳母としては空前絶後のことですが、家光は七日間の喪に服し、江戸市中鳴物停止、群臣統々と登城して弔意を表し、葬儀は盛大であり、特に一字を建立してその菩提を弔ったと言われます。

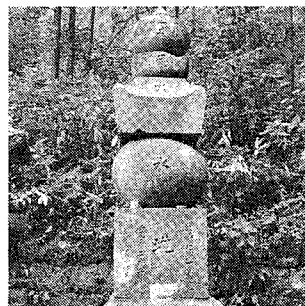
その墓は今も東京湯島の鱗祥院に存し、別に供養塔が、その孫鶴千代、後の小田原城主稲葉美濃守正則によって、長興山紹太寺の稲葉家墓所に建立され、修復中の春日局一夜門

足柄上郡井ノ口村(現在中井町井ノ口八八八)所在の旧家大島家は、旧姓は尾上。鎮西八郎為朝の次子、島の冠者為頼の後裔であり、為頼は為朝の死後伊豆大島を逃れ、母に俱して海老名郷に土着し後数世、監物盛時に至りて大島氏を称しましたが、その子勝盛長じて尾上家の養子となり、後に実家の氏に改称したのでそうです。



この四郎兵衛勝盛は大島家中興の祖と云われ、大坂兩度の合戦に兵糧運送の功を賞せられて所持の田地六十三石一斗余の貢税を軽減され、後に万治三年

春日局供養塔(入生田)



別に遺物が京都鱗祥院に保存されているそうです。

中井町井ノ口に春日局が一夜の宿をとったことがあり、その当時の門が今も残されていて、春日局の一夜門と呼ばれていますが、如何なる故にて江戸城の奥にありし春日局が、草深い井ノ口まで赴いたのでしょうか。

(六〇) 領主稲葉正則檢地に際し、古来の由緒を賞されて新たに高六石段別一町五反の地を与えられ、さらに五代の孫、四郎兵衛為勝の代に、延享三年(一七〇六)上下足柄郡御林見廻役を命ぜられ、年々三石五斗の給米を給わり、近在きつての旧家として、子孫相継ぎ、家富み栄え、後に中村・井ノ口村、両村合併して中井村となった時、初代村長を勤めたこともあるそうです。

『徳川實記』及び『徳川十五代史』によりますと、春日局は寛永十七年(一六四〇)五月に江戸を出発し、伊勢參宮、さらに上洛して女院御所に東福門院を奉伺し、帰途、大山・鎌倉・日光を廻って八月末日に帰着しています。愛孫正則の居城小田原を出発すれば、梅沢の宿場から左折して秦野道に入り井ノ口まではおよそ二十キロ、五里強。足弱を連れての旅であれば確かに一日行程であり、旧家でもあり、また稲葉家の領内でもあった井ノ口村の大島家に、春日局が大山不動參詣前の宿を求めたとしても不思議ではないでしょう。

惜むらくは享保十五年(一七三〇)の火災によって、八費をもって修造したという家屋も、証拠となる文書も、門を残して一切が烏有に帰し、資料としては曖昧な点のある『新編相模国風土

中井町井ノ口は、一昔以前は草深い田舎で、小田原領にその村があったことさえ知る人も少なく、往来する人もまれな山里でしたが、現在では東名高速道秦野中井インターが至近にあり、県道秦野二宮線も拡幅工事中であり、交通も四通八達、居住に適した地として戸数を漸増しています。

旧家大島家は、現在の家屋こそ慎しいものですが、北に數、西に山を負い、上下二段に分れた敷地は広く、さすがに近在に聞えた旧家の跡とて、菩提寺の米倉寺の墓地も他家とは異なり、門脇に特別の一郭を占め、往時の勢威が偲ばれます。

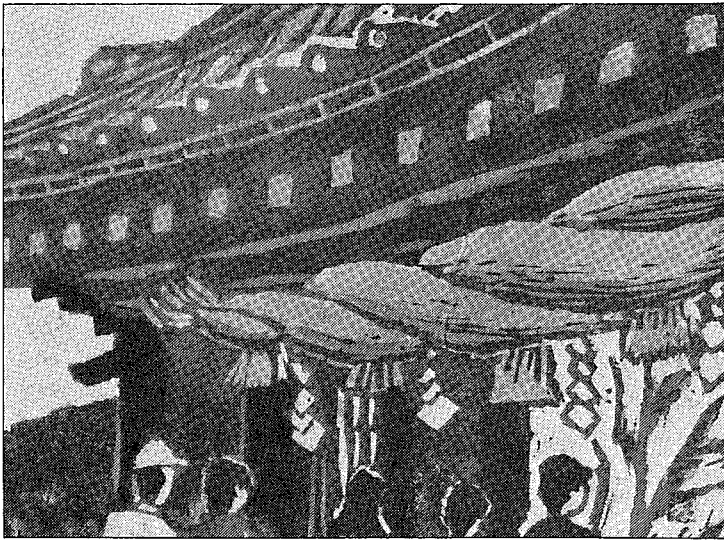
問題の一夜門は、旧秦野道に面し、老朽化腐蝕が進んで、現在修復中ですが、まもなくその威容を見せてくれるでしょう。

井ノ口上手の風合(フウコク)井ノ口の名の語源となった弁天様の周辺、米倉寺、等々と併せて、春の日長にでも、一度杖をひかれるのも一興と存じ皆様にご紹介させて頂きます。

『記稿』所載の記事にたよるほかに、史跡としては認定されていないとのことですが、そういうことがあったとしてもおかしくはない、とだけは申しても宜しいでしょう。

井ノ口の名の語源となった弁天様の周辺、米倉寺、等々と併せて、春の日長にでも、一度杖をひかれるのも一興と存じ皆様にご紹介させて頂きます。

初詣 三島大社 真壁敏男 画



伊豆国の一の宮。治承4年源頼朝が蛭ヶ小島から山木判官を襲撃に三島社の祭日の雑踏を利用、以来伊豆山権現と共に、毎年正月、將軍自ら参詣する二ヶ所詣が行われた。祭神は大山祇命、明治になって事代主命を合祀。

三島大社初詣(1月22日)

和田登仙

三島大社初詣
冬麗や大社々殿の彫刻深く
山中城趾にて
北条の恨み凍てたり大き富士
蕪山江川邸にて
がらんの代官屋敷 寒鴉
願成就院にて
茶々丸の墓の奥処も冬ざれて
蕪山反射炉にて
反射炉にかつて燃えし火福寿草

郷土関係の刊行物

昭和63年6月~12月

小田原図書館並びに市内三書店調査

- ◇開校50周年記念誌「芦子」
小田原市立芦子小学校編
A5変型 80p
- ◇小田原男声合唱団15年誌
A4版 34p
- ◇小田原市立病院30年記念誌
B5版 137p
- ◇小田原の名産品
小田原市役所経済部商工課編 B5版 カラー写真 17p
- ◇荻窪用水を尋ねて
小田原市教育委員会文化財保護課編 A5版折たたみ
- ◇55年の歩み
小田中二八会発行
B6版 130p
- ◇21世紀に生きる ==活力とうるおいのある長寿社会をめざして==小田原市高齢化社会研究会編 B5版 209p
- ◇青じくの梅 佐藤文代編 B6版 136p (尾崎一雄にかかわる内容)
- ◇学校って親って 高松義明著 (小田原市) B6版 175p
- ◇特異点 隠岐威重著(小田原市) B5版 153p
- ◇随筆ゆけむり 児島豊著 (箱根町) B6版 40p
- ◇第60回記念・小田原きつき会の歩み B5版 27p 小田原きつき会編 B5版 27p
- ◇小田原と自然 7号 小田原と自然 B5版 51p
- ◇ふるさと歴史随想

- 興津繁著 B5版 132p
- ◇あしがら 門出会記念文集 穂坂正夫編 B6版 241p
- ◇生きている民話 湯山厚 (南足柄市) A5版 216p ¥1,200
- ◇箱根宿歴史地図 中村静夫作 中村地図研究所発行 ¥880
- ◇西さがみ歴史への旅 福島 匠著 ポスト広告出版局発行 A5版 236p ¥1,200
- ◇すばらしい箱根 箱根登山鉄道編・発行 A4 100p ¥1,800
- ◇仙石原湿原の四季 井上香世子著 神奈川新聞社発行 新書版 245p ¥980
- ◇箱根の鉄道 市川健三編著 大正出版発行 B4変形 148p ¥2,800
- ◇北条五代に学ぶ 小山龍太郎著 六興出版発行 B6版 251p ¥1,200
- ◇わたしの関東大震災 石田重光著 (山北町) 近代文芸社発行 B6版 197p ¥1,000
- ◇青春山歌 新編相模風土記 稿の山を行く 神奈川高体連山岳部編 神奈川新聞社発行 B6版 310p ¥1,300
- ◇「おだわら」一歴史と文化一 2号 小田原市役所発行 A5版 149p ¥950
- ◇足柄野の花 内田勇著 自治新報社発行 A5版変型 130p ¥2,000
- ◇実朝と秦野 貫達人監修 夢工房発行 新書版 142p ¥700
- ◇丹沢シカ博士の動物おもしろ話 鹿のフンは何故ツブツブ? 神奈川新聞社発行 B6版 254p ¥1,300
- ◇二宮のむかし話 “こどもの四季” 松本昇平著 伊勢治書店発行 B6版 122p ¥600

古都鎌倉史跡めぐり(II)

下川茂三郎

七、鶴岡八幡宮

鎌倉市中央部の大臣山南麓に、源氏の守護神として街の中軸にふさわしく鎮座。大分県の宇佐・京都府の石清水両宮と共に全国八幡宮の代表的な存在・鎌倉歴史の出発点。

祭神は応神天皇・比売神・神功皇后で旧国幣中社。

康平六年（一〇六三）源頼義が奥州の安部貞任平定の際、戦勝を祈って石清水八幡宮を由比郷鶴岡の地に勧請奉祀したのが（元八幡）起源とされる。

治承四年（一一三二）源頼朝は鎌倉に入ると、社殿を現在の地に遷座し、源平池、若宮大路など結構し、翌年五月改めて社殿を造営。しかし建久二年（一一三二）市

中の大火に類焼し諸社殿を焼いたが、直ちに復興され、従来の若宮とは関係なく石清水八幡から勧請したのが、今の本宮（上宮）で、このとき若宮（下宮）を再建したので、社殿は山上と山下の両宮になったという。

武門の神として足利氏・小田原北条氏・徳川幕府な

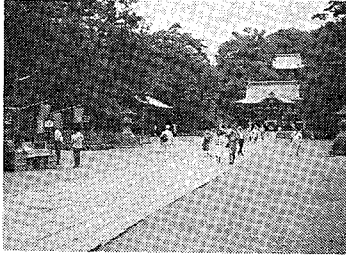
どの保護を受け社運は隆盛した。

現在の若宮は寛永元年（一六二四）徳川家光・本宮は文政十一年（一八二〇）十一代将軍徳川家斉の再建したもので、流権現造り総朱塗り

は周囲に茂る老樹と調和して美しい。

本殿手前石段下左手の樹令数百年の「隠れイチョウ」がそびえている。承久元年（一一三二）正月・三代将軍右大臣源実朝が鶴岡社頭で拝賀の帰途、この木の蔭にか

鶴岡八幡宮



舞殿の東方に安徳天皇他三神を祀る若宮神社、その東森の中にかつて小田原城を陥れて、ここに参拝した、豊臣秀吉が「天下の英雄、吾と君とのみ」といつて笑

いながら肩をたたいたという、源頼朝の木像があった白旗神社がある。

本宮西寄りの小高い丸山に末社丸山稲荷社がある。室町中期の造営で、流見世棚造り。国指定重要文化財。

社宝類も多く国宝、重文等いずれも神社宝物館や、鎌倉国宝館に収蔵されてい

る。

正月の初詣や節分祭、九月十五・六日の例大祭、流鏝馬行事には数方の参拝観光客で賑わう。

八、鎌倉国宝館

大正十二年の関東大震災で市内の社寺多くが、倒壊、文化財の損傷大のため、昭和三年市民や社寺の要望により市が設立した。

建物は奈良の正倉院を模した鉄筋コンクリート校倉造り面積約六〇〇平方メートル。収蔵品は彫刻・絵画・古文書工芸品など多くの国宝・重要文化財が保管、陳列されている。特に鎌倉・室町期の禅宗文化の粋を集めている。

館の入口で富田副会長から収蔵品の主だった説明を聞き、流鏝馬道より八幡宮

東門を出て、畠山重忠屋敷跡の碑を経て、横浜国大附属小・中学校・この附近が幕府の西門のあった所。

九、大倉幕府跡
清泉女学院付属小学校敷地一帯をいう。治承四年（一一三二）十一月、源頼朝が鎌倉に入ってから嘉禄元年（一二二二）十一月、宇都宮幕府へ移るまでの四十六年間

にわたって幕府を置いた所で、武家政治の発祥地である。この地は頼朝の祖である頼義の居館跡で、山ノ内の首藤兼道邸を移築して頼朝館を建てた。二百米四方

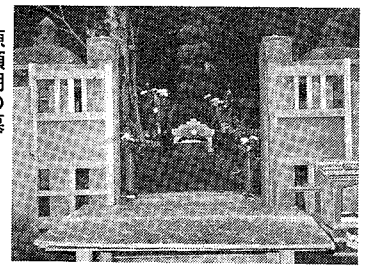
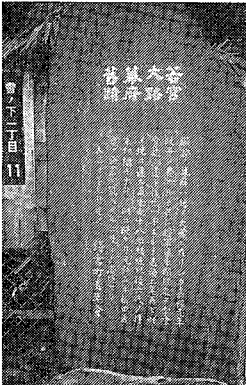
の敷地内に館をはじめ、公文所・問注所・侍所などがあつた跡碑がある。

この辺から私の説明分担になりますが、大分皆さん歩行づかれの御様子。

十、白旗神社（法華堂）
大倉山南麓にありもと頼朝の持仏堂があり、石橋山の合戦のとき髪の中に納めて

戦ったという観音像が安置され、頼朝公の命日には將軍も参詣し仏事を執り行い、多くの武将も参列した。

若宮大路幕府跡



源頼朝の墓

門と言いつこに葬られた。墓は初め九十種の五輪塔であったが、安永八年（一七九三）島津家二四代の藩主島津重豪が、祖島津忠久と大江広元の墓を改修したとき、方形の台石の上に五輪塔の笠石を五枚積みかさねた。高さ一、八米の多層塔に修復した。

征夷大将軍の墓とは思えない簡素なもので、老樹の下に茶店と共にひっそりと苔むしている。国の史跡。なお島津忠久と大江広元の墓は北東へ百米ほど離れた山腹のやぐら内にある。

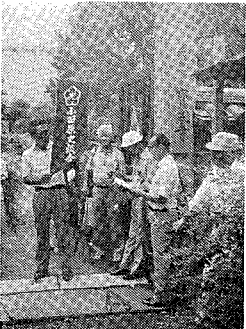
十二、筋替橋
鎌倉十橋の一つで、町屋を免許された商業地域の一

角に「須地賀江橋」の石標がある。

十三、宝戒寺
鶴岡八幡宮三ノ鳥居の東にある天台宗、金亀山釈迦院と号し、鎌倉地蔵尊二四番札所霊場の第一番・鎌倉

観音三十三札所第二番。ここは北条義時が小町亭を作つて以来、北条執権の代々の屋敷跡で、元弘三年

宝戒寺



第十四代執権北条高時一族が滅亡後、後醍醐天皇が足利尊氏に命じてこの屋敷跡に寺を建立させ北条氏一門の霊を弔った。

開基は天台座主五代国師円観鎮慈威和上と伝える。

天台密教の関東弘道の道場として戒壇院を置き、加賀白山の薬師寺、伊豫の等妙寺、築紫の鎮弘寺と共に遠国四箇の戒場といわれた。

二世普川国師惟賢和上は国家鎮護のため和合仏たる歡喜天尊像(聖天様)を造立し、特殊修法も定め祈念した。

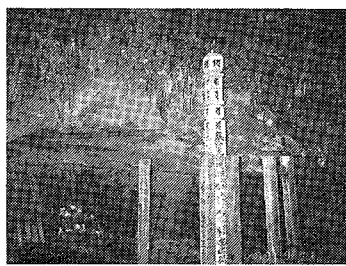
天正七年(三三〇)七堂伽藍ごとごとく焼失した。

江戸時代に入って天海大僧正が徳川家康に寺の保護を懇願して、四宗兼学の道場として栄えた。

寺宝に国重の本尊木造地藏菩薩座像、木造歡喜天立像、性賢和尚坐像などある。

寺域一帯に白い花をつけた萩が見事で一名萩寺という。山門前の説明で次え。十四、東勝寺橋

寺の旧蹟は滑川沿いで後方は屏風山と、小富士山に囲まれた要害堅固な場所、元弘三年(三三三)五月二十一日、十四代執権北条高時は新田義貞に攻められよく防戦に努めたが戦運利あらずして、一族門



腹切やぐら

表示がされている。裏山に北条高時と一門が切腹した霊を祀る「腹切やぐら」がある。

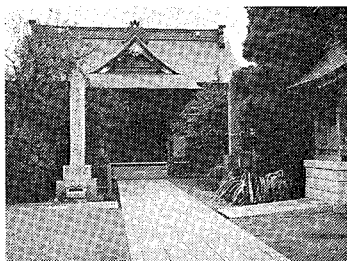
毎年五月盛大な供養が行なわれ、新しい供養柱塔が建てられ、たくさんの方々が供えられている。

引返し旧小町大路を下る。十六、妙隆寺

日蓮宗叡昌山と号し、源頼朝の御家人千葉常胤の子孫、千葉大隅守平胤貞の旧地で、明徳四年(三九三)七堂伽藍を建立し、妙親院日英上人を迎えて開山した。

応永三十四年(四三〇)の冬、第二祖日親上人は二十一歳で来りて、堂前の池で寒百日間水行を修行し京に上り、立正治国論の一書を足利義教將軍に提呈し、政道を諫めんとして捕えられ、焼鍋をかむせられる極刑を受けた。その後も耐え忍んで法華經の弘道につとめ、長享

妙隆寺



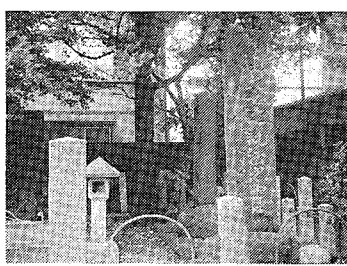
東勝寺旧蹟
葉八百七十余人と共に先祖代々の菩提寺に籠り、自害して果て滅亡した。寺は廃寺され鎌倉文化財保護課で管理

二年(四六八)九月十七日、世寿八十二歳で京都本法寺にて遷化され、後年鍋冠日新の名を残した。寺宝に日蓮宗上人像九体・鎌倉江ノ島七福神の寿老尊木像等がある。

十七、日蓮辻説法跡

若宮大路の東に並行する小町大路沿いの、雪の下から材木座方面に向う角地で鎌倉時代は武家屋敷と商人町を結ぶ往来の激しい通りであった。建長五年(二三三)安房清澄寺で題目を唱え、一派を開いた日蓮は鎌倉に庵を結んだ。当時の鎌倉は風水害・大地震・早魘・飢饉・疫病など天変地異でおのっている民衆に向かつて、毎月ここに立つて法華經を説き、既成の仏教各宗派を攻撃する論陣を張った。そのまわり十六米余りを竹垣で囲って遺跡としている。

日蓮辻説法跡



大巧寺

長慶山正覚院と号し、真言宗の頃は太行寺と称し十二所の梶原屋敷にあった。源頼朝がこの寺で戦評定をしたところ、勝利を得たので大巧寺と改め、元応二年(三三〇)現地に移したとい

う。日蓮に帰依し日證を開山とし、本尊は産女靈神なので、これに安産を祈れば効験があるといひ、安産の守札を出している。

天文年間五世日棟が難産で死んだ産婦の靈魂をしずめ、安産の神として祀ったことに由来するという。俗に「おむめさま」と呼ばれている。

本堂をお借りして休憩を含め当堂並に次の本覚寺の由緒説明会と合せ、雨が降り出したので本覚寺を巡寺終了次第現地解散を予告。十九、本覚寺

滑川の夷橋際で日蓮宗妙厳山と号し、里門がある。文永八年九月十二日日蓮は竜の口法難をのがれ佐渡に流罪となり、約三年後の文永十一年(三三三)三月二十六日・流罪赦免となりこの夷堂に四十数日滞在して、五月十二日身延山に立出した。日蓮聖人去って百六十年目の永享八年(四三三)日蓮ゆかりのこの地に日出上人が寺を建立。

二世日朝上人は伊豆宇佐

美の人で、幼ない時から学徳にすぐれ四十歳で身延の住職となり、俗称日朝様といわれ眼病、学問の神とあがめられ、なお身延から日蓮の遺骨を分骨して東身延と称し、関八州日蓮宗僧録を司どり、小田原北条、徳川の庇護を受け隆盛を極めた。寺域は八千五百平方メートル、本堂、庫裏、祖師堂、客殿、仁王門、夷堂など備える。

境内に鎌倉期の刀匠幼名五郎、正宗は文永元年(三三三)生れて、正平二年(三三三)八十二歳で没し、法名を心竜日頭という。

二代貞宗以下先祖六代の墓がある。七代広綱より小田原北条氏綱に任せ、氏綱の綱を代々用いて二十四代に及んでいるという。

夷堂は源頼朝の建立で幕府の守神とした。寺宝に木造釈迦如来座像・文殊・普賢両菩薩坐像を伝蔵する。

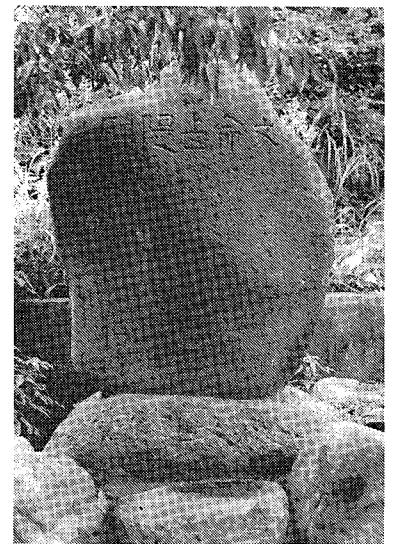
午後四時本覚寺境内で解散し、各自無事御帰宅頂いたが、きついコースでむし暑く時々の降雨で大変おつかれに成られたでしょう御苦勞様でした。御参加感謝申し上げます。今回は中野敬次郎会長最後の由緒説明をそれぞれ各役員が分担して説明致しましたが如何でしたか御批評頂ければ幸甚の至りに存じます。(了)

の至りに存じます。(了)

西相模の石造物(10)

山北町岸 文命西堤碑

田中丘隅は、享保十一年に建てた、と『新編相模風土記稿』に載っている。お、風土記には、丘隅の浦のため禹王(夏の始祖、堯・舜に仕え治水に功があった)を、は、その後、何回も決潰り、記念碑を東西二カ所している。(岡部忠夫)



落穂集

◎写真は昭和天皇崩御の当日、小田原市内のあるデパートで派手な広告を取り外しているところ。自粛の掲示を出していたのは、証券会社、銀行の宝くじ販売所。店頭看板を店内に引っ込め自粛の掲示をしていた外食の連鎖店もありました。



特別賛助会員

- 智恵袋 相田酒造店
- 小田原銀座 アオキ画廊
- 足柄香粧株式会社
- 飛鳥 魚屋
- 紳士服の **アメリカヤ**
- 画材 ガクブチ **ゆうえ**
- 伊勢治書店
- ⑤ かまぼこ
- 株式会社 **江島**
- 株式会社 小田原魚市場
- ◎ **小田原ガス**
- 小田原信用金庫
- 小田原報徳自動車
- 株式会社 **オートセンター・スギヤマ**
- ⑧ 小田原中央青果 株式会社
- かまぼこ 籠 **清苑**
- 令 学 苑
- 鐘紡株式会社小田原工場
- 力本ボウ化粧品鴨宮工場
- 興電社
- ⑨ 清水甘納豆
- ⑩ **正栄堂**

- 鈴 廣 木まぼこ
- 辰寿堂スポーツ
- 大 営 不 動 産
- 割烹 おる海
- ④ そびそ二 宮
- 茶半家具株式会社
- ちんぎょう本店
- 角田ガクブチ店
- 株式会社 東華軒
- 八小堂書店
- 八子マサ
- 平井書店
- 富士写真フィルム製小田原工場
- 株式会社 **報徳屋**
- 松坂 **マルク**
- 学生専科 ⑨
- 食器の店 マルサンストア
- 株式会社 **美濃屋吉兵衛商店**
- スーパーマーケット 株式会社 **ヤオヤク**
- 山口菓子舗
- 湯浅電池 株式会社 小田原工場

デパート、スーパーなど大型店では、哀悼の意の表示のほか、パーゲンの垂幕の巻き上げや、店頭でのワゴン販売中止などで対応。JR小田原駅前ではさる新聞社が号外を配付していました。商店街では全店が弔旗を出していたのが一カ所、半数というのが一カ所、あとは、ちらほらか、全く見かけない、といったところ。パチンコ店の賑わいはいつもとあまり変らなかつたように見受けられました。◎大正天皇祭といつても、知る人は少なくなつていますが、十二月二十五日のこの日、大正天皇をお祀り続けてきている結婚式場を営む会館が東京千代田区にある、とは、大手の金融機関から、この会館に出向したS氏の話。何等皇室とは関係ないが、会館の創立者の先代が「大正天皇はお気の毒な方である」と、始めたもので、部長が衣冠束帯の姿で祝詞を奏上するということです。◎高田喜久三氏、神静民報に「尊徳の系譜 富士・筑波・石狩川」と題して連載、期待されます。◎生徒動員の頃の思い出を書いて下さった方々間違つたことを記してはならない、多くの級友や関係者に連絡をとられた由、多謝◎紙数の関係から「幕末、中島・本久寺に住持された成貞法尼」と「坂本紅蓮洞」を次号以下に回しました。◎次号は六月の予定(陶生)